

[目次]

日本生態学会各賞候補者募集	1
第 62 回日本生態学会大会案内	5
第 61 回日本生態学会（広島大会）総括	10
記事	
I. 日本生態学会大会総会において決議された事項.....	14
II. 一般社団法人日本生態学会平成 26 年度第 2 回定時総会、 全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項.....	15
A. 報告事項	
B. 承認事項	
C. 決議事項	
III. 第 61 回日本生態学会大会記録.....	27
IV. 書評依頼図書.....	31
V. 寄贈図書	32
お知らせ	
1. 公募.....	32
書評.....	32
公募カレンダー.....	43
一般社団法人日本生態学会役員一覧.....	44
京都大学生態学研究センターニュース.....	47

日本生態学会各賞候補者募集

第13回「日本生態学会賞」

顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

第19回「日本生態学会宮地賞」

生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として3名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第8回「日本生態学会大島賞」

例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として2名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々10万円の賞金が贈呈されます。

第3回「日本生態学会奨励賞（鈴木賞）」

学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者に授与される賞です。自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から若干名の受賞者を選考し、「日本生態学会鈴木基金」から各々5万円の賞金が贈呈されます。

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書式：生態学会ウェブサイト (<http://www.esj.ne.jp/>) よりダウンロード
3. 送付先：〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会〇〇賞選考委員会委員長
(〇〇は応募する賞名を入れて下さい)
4. 締め切り日：2014年8月15日（必着）

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は代議員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。

また、受賞候補者が無い場合には、総会の上承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会大島賞細則

第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。

第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。

第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。

第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の上承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。

第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。

第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。

第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。

第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

日本生態学会奨励賞（鈴木賞）細則

第1条 日本生態学会奨励賞（以下奨励賞という）は、本学会の会員であり、学位取得後4年くらいまで（大学院生を含む）の今後の優れた研究展開が期待できる研究者で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として若干名とする。

第2条 奨励賞受賞候補者を選考するため、奨励賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。

第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。

- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者あるいは推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を代議員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、総会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および鈴木基金より賞金5万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には理事会の3分の2以上の同意を要する。

第 62 回日本生態学会大会（鹿児島）案内

第 62 回日本生態学会大会（公式略称 ESJ62）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35 鹿児島大学理工学研究科（理学系）気付

第 62 回日本生態学会大会（ESJ62）実行委員会

担当：鈴木英治（大会会長）、山本智子（大会実行委員長）

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/62/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページからリンクしている問い合わせページからお願いします（学会事務局にお問い合わせいただいても対応できません）。

大会に関する最新情報は、大会公式ホームページで確認して下さい。

日程・会場

2015 年 3 月 18 日（水）～ 22 日（日）

鹿児島大学郡元キャンパス（<http://www.kagoshima-u.ac.jp/index.html>）

鹿児島市民文化ホール（<http://www.k-kb.or.jp/shibun/>）

詳細は次号のニュースレターでお知らせします。

提案・申込の受付開始・締切

【受付開始】

シンポジウム企画提案 2014 年 5 月 27 日（火）から

英語口頭発表賞エントリー 2014 年 7 月 1 日（火）から

他の申込み 締切の 1 ヶ月程度前から

【締切】

講演者・企画者で新規に入会（未納退会で再入会を含む）する方の入会申込

2014 年 10 月 23 日（木）17:00

（入会手続き <http://www.esj.ne.jp/office/member/index.html> を参照）

上記の方の 2015 年学会費入金

2014 年 10 月 23 日（木）入金分

シンポジウムの企画提案 2014 年 7 月 31 日（木）17:00

英語口頭発表賞エントリー 2014 年 9 月 1 日（月）17:00

企画集会申し込み 2014 年 11 月 6 日（木）17:00

自由集会申し込み 2014 年 11 月 6 日（木）17:00

一般講演申し込み 2014 年 11 月 6 日（木）17:00

講演要旨登録 2015 年 2 月 4 日（水）17:00（予定）

一般講演口頭発表用ファイルの登録 大会の数日前

※スケジュールに変更の可能性がありますので、適宜、大会公式ホームページで確認ください。

※すべての締切に関して、締切後の追加や修正等の依頼には、対応できません。

大会参加資格一覧

会員種別ごとの参加資格は以下の通りです。なお講演の重複制限については、各集会および一般講演の詳細をご覧ください。

講演種別 \ 会員種別	正会員	非会員
一般講演（口頭・ポスター）	○	
シンポジウム企画	○	
シンポジウム講演	○	○
シンポジウム・企画集会・自由集会のコメンテータ *1	○	○
企画集会企画	○	
企画集会講演	○	○ *2
自由集会企画	○	
自由集会講演	○	○

*1 要旨を登録しないコメンテータ。要旨登録を行うコメンテータの資格は「講演」に準じます。

*2 大会企画委員会・大会実行委員会が特別に認めた場合に限り、集会あたり1件まで可能です。

- ・非会員が講演・企画を希望される場合は、2014年10月23日（木）までに2015年の入会を申し込むとともに、2015年の学会費を納入して学会員となって下さい（会費滞納による退会者の再入会の場合も同様です）。
- ・高校生ポスター発表会については、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」の詳細をご覧ください。
- ・非学会員でも、大会参加費をお支払いいただければ、聴衆として参加できます。

大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費・懇親会費は、学会費と別に納入していただきます。詳しくは、次号のニュースレターでお知らせします。
- ・学部生の参加を促進するために、大会参加費の大幅な割引もしくは無料化を検討中です。
- ・自由集会のみに聴衆として参加する場合には、大会参加費は不要です。

公開講演会

講演会タイトル：「南西諸島の生物多様性、その成立と保全」（予定）

日時：2015年3月22日（日）13:00～16:30

会場：鹿児島大学 郡元キャンパス 法文学部 203 講義室

内容の詳細については、次号のニュースレターでお知らせします。

シンポジウムの企画案の公募

ESJ62では、大会シンポジウムの企画案を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。大会シンポジウムの企画は、2014年7月31日（木）17:00までに大会公式ホームページからご提案下さい。

【企画内容について】

- ・大会参加者は、毎年多様なテーマに関するシンポジウムが開催されるとともに、それまでにはなかった新鮮なテーマのシンポジウムが開催されることを期待しています。大会企画委員会は、シンポジウム企画経験の少ない方からの企画提案を歓迎します。
- ・企画案は講演者が決まっていない Seeds 段階のものでもかまいません。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。招待講演者の参加費は無料となります。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。

【英語使用について】

- ・日本生態学会では、留学生や海外からの研究者による大会参加が増えています。今後もさらに大会参加者どうしの研究交流が進むことを目指して、ESJ62では、シンポジウム・集会等における英語の使用（日本語との併用を含む）を奨励します。
- ・英語で開催されるシンポジウムは優先的に条件の良い部屋に割り付けます。

- ・日本語で開催されるシンポジウム・集会では、可能な範囲で、スライドでの英語の併記や簡単な英語版ハンドアウトの用意などの工夫をお願いします（ハンドアウトや2か国語スライド等は、英語開催のシンポジウム・集会において非英語話者の参加を促すのにも有効です）。
- ・ESJ62では、シンポジウムで講演する海外研究者のうち1名以上をEcological Research誌による招聘講演者として採用予定です。招聘講演者は旅費の支給を受ける事ができ、大会参加費も無料となります。大会後にシンポジウム内容に関連したレビュー論文もしくは特集論文などをEcological Research誌に投稿していただくことが原則となります。

【企画案の採用について】

- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には企画者（オーガナイザー）としての参加を要請します。
- ・大会企画委員会はコーディネータを出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。

【応募の制限について】

- ・企画者は日本生態学会正会員に限ります。非会員は企画者（企画の責任者および連名の共同企画者を含む）になれません。
- ・異なるシンポジウム間で重複して企画者または講演者となることはできません（「講演者」は「講演の主たる説明者」を意味します。以下同様）。企画段階で重複が確認された場合には、コーディネータを通じて調整をお願いします。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は企画集会の企画者・講演者になることはできません。
- ・シンポジウムの企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えられません。

企画集会と自由集会

ESJ62では、企画集会と自由集会を募集します。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込み下さい。企画集会・自由集会ともに、企画者は日本生態学会正会員である必要があります。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに個人および団体を誹謗中傷する内容などを含むと判断されるものについては、その限りではありません。

【企画集会】

- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・企画集会の企画者・講演者はシンポジウム及び他の企画集会の企画者・講演者となることはできません。
- ・企画集会の企画者・講演者は一般講演（口頭発表、ポスター発表とも）の講演者にもなれません。
- ・企画集会での講演者（主たる説明者）は原則、日本生態学会正会員に限定されます。非会員による講演は、特に事情があり企画提案時にその理由を記載した場合のみ、企画あたり1件まで認められます。ただし、同一の非会員が2年連続で、企画集会で講演することは認められません。
- ・要旨登録を行う「趣旨説明」や「コメント」は1講演とみなされ、その応募資格や重複制限は「講演」に準じます。要旨登録を伴わない趣旨説明やコメントは講演には数えられません。
- ・限られた会場を平等に分け合って使用するため、企画集会はできるだけ3人以上の講演者で構成して下さい。

【自由集会】

- ・自由集会は、新しい分野の立ち上げを助け、生態学の枠組みからはみ出す話題についても自由に議論できる場として、生態学会が伝統的に重視してきた集会です。しかしあくまでも関連集会であって、大会の正式行事ではありませんので、自由集会のみの参加者は大会参加者とはみなされません。
- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの重複発表は認められますが、原則として日程の調整は行いません。
- ・大会の正式行事ではありませんので、会場は集会主催者が責任をもって管理して下さい。

【応募要領】

企画集会または自由集会の開催を希望される方は、**2014年11月6日（木）17:00**までに大会公式ホームページからお申し込み下さい。企画集会については、集会の提案・概要登録時に、講演者および共同発表者と講演タイトルも併せて登録します。また、企画集会・自由集会の企画者、および企画集会の講演者は、集会提案時までに大会への参加登録を済ませて登録番号を取得しておく必要があります。これらの締切はすべて11月6日（木）17:00です。ご注意ください。

【企画集会と自由集会の採否について】

- ・ 企画集会は、自由集会に優先して採択されます。提案された集会（企画集会・自由集会）の数が会場の収容可能数を上回る場合には、全部の自由集会の開催を取りやめても会場が足りない場合にのみ抽選を行い、企画集会の採否を決定します。
- ・ 自由集会の提案数が会場の収容可能数を上回る場合には、同一会員が重複して複数の集会（自由集会・企画集会）の企画者となっている自由集会を不採択とします。次に、大会シンポジウム企画者による自由集会を不採択とします。それでも数が多い場合には、抽選で自由集会の採否を決定します。
- ・ 限られた場所と時間を分け合って使うため、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は自由集会の企画を可能なかぎりご遠慮下さい。2つ以上の自由集会の企画・講演もご遠慮下さい。
- ・ 開催の可否については、11月18日（火）までにメールでご連絡します。

大会シンポジウム・企画集会・自由集会の違いは以下の通りです。

	シンポジウム	企画集会	自由集会
位置づけ	大会の核となる集会。大会の正式行事	シンポジウムに次いで核となる集会。大会の正式行事	様々な話題を自由に議論できる場。大会の正式行事ではありません
開催時間	約3時間	約2時間	約2時間
開催の優先度	最優先されます	シンポジウムの次に優先されます（自由集会の開催を全て取りやめても会場が足りない場合のみ、抽選で採否を決定します）	優先されません（会場が足りない場合は抽選で採否を決定します）
日程・時間	最優先されます（聴衆の集まりやすい日時に割り当てられます）	シンポジウムの次に優先されます	優先されません
企画運営段階での企画委員会の関与	関与します。企画委員がコーディネータとして企画運営を支援します。内容の重複がみられる場合、複数のシンポジウムの合体を勧めることがあります	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します	特定の個人や団体を誹謗中傷する内容がないかだけを審査します
企画者の資格	正会員	正会員	正会員
非会員による講演	奨励します（審査の上、招待講演者として参加費を免除します）	集会あたり1件まで可（同一非会員の2年連続は不可）。大会参加費を支払う必要があります	認められます（自由集会での非会員講演者が大会の他行事に参加する場合には、大会参加費を支払う必要があります）
海外からの招待講演者への学会からの旅費支給	大会全体で1名以上認められます	なし	なし
一般講演との重複発表	不可	不可	可
他集会との重複発表	自由集会・フォーラムのみ可能	自由集会・フォーラムのみ可能	全て可能
提案締切日	7/31（木）	11/6（木）	11/6（木）
概要登録/集会の概要及び講演者（主たる発表者及び共同発表者）と発表タイトルの登録締切日	11/6（木）	11/6（木）	11/6（木）
プログラムおよび要旨集への掲載内容	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要が掲載されます。要旨集には各講演の要旨も掲載されます	集会概要のみ掲載されます

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企

画やフォーラムでの話題提供は、重複発表制限の対象となりません。

一般講演

- ・一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。
- ・発表内容に応じて会場・時間の割り振りをいたしますので、発表申し込み時に適切な分野を選んでいただきます。ESJ62における発表募集時の分野の区分については、現在、企画委員会で検討しており、決定次第ホームページでお知らせしますので適宜ホームページでご確認下さい。なお、応募状況に応じて募集時の区分は統廃合されますので、大会開催時の分野区分は募集時のそれと異なる可能性があります。予めご了承下さい。
- ・口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。また、英語による発表を集めた「英語口頭発表枠」を選ぶこともできます（発表内容に応じた分野分けも行います）。この場合は、下記の「英語口頭発表賞」にエントリーした発表と共にセッションを構成します。

注意：

- ・一般講演の演者は、日本生態学会正会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・1人で2つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムおよび企画集会の企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承下さい。

高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」

- ・日本生態学会は、生態学の社会への普及のため、アウトリーチ活動の一環として、高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を実施しています。第61回広島大会では、学年末の多忙な時期にもかかわらず、3月15日（土）に54件の発表があり、最優秀賞、優秀賞などたくさんのポスターを表彰しました。引き続き、第62回鹿児島大会でも高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催します。
- ・高校生（中学生も歓迎です）にポスター発表をしていただき、生態学諸分野の専門家や学生、他の参加校との交流を通して、生態学全般への関心をさらに高めていただくのが本企画のねらいです。生き物の生態や環境に関わる生物学の内容であれば、どのような分野や題材の発表でも大歓迎です。既に他の学会等で発表された研究の場合、そこからどのように発展したのかを含め、研究の集大成・経過報告としてご発表ください。参加費は無料です。
- ・開催日時や参加申込み・要旨登録・授与される賞等の詳細については、次号のニュースレター／日本生態学会公式HP／全国規模のML等で配信しますので、ぜひお知り合いの高校教員や高校生に周知していただきますよう、よろしくお願いいたします。

英語口頭発表賞

ESJ62では、英語口頭発表賞を設け審査を実施します。賞の目的は、大会における英語による研究発表を振興し、留学生や国外からの参加者との議論の場をより多く作ることです。特に若手研究者のコミュニケーション能力と国際的情報発信力を高める機会を増やすことを重視しています。参加される方は英語口頭発表賞ホームページを見て9月1日までにメールで申し込んで下さい。また、最新の情報も同ホームページに随時掲載されますので、興味のある方は定期的にチェックして下さい。

<https://sites.google.com/site/esj62engpresenawarden/>

ポスター賞

ESJ62では、若手（学位未取得者）の研究を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター発表では、日本語を理解しない参加者への配慮を推奨します。ポスター賞の運営、応募資格、審査方法などについては、次号のニュースレターに掲載します。

エコカップ2015

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ2015が行われます。主催はエコカップ2015実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

国際化と簡素化 第 61 回日本生態学会大会（広島）総括報告

久米篤（大会企画委員会前委員長）

日本生態学会第 61 回大会（広島大会）は、2014 年 3 月 14 日（金）～ 18 日（火）にわたって開催されました。参加者の公式記録は 2464 名（自由集会を含めず）にも達し、事前申込者数 1509 名、当日受付数 694 名、招待講演者数 22 名、招待者数（同伴者含む）22 名、高校生 217 名（高校生名札印刷）となりました。大会企画としては、シンポジウム 17 件、フォーラム 7 件（内ポスター 1）、企画集会 25 件が実施され、30 件の非公式集会（自由集会）が実施されました。一般講演数は口頭発表 214 件（うち英語発表賞応募 43）、ポスター発表 944 件（うちポスター賞応募 407）、高校生ポスター発表 55 件の合計 1,213 件となりました（発表登録数）。学会会員数が減少に転じた中で、大会参加者数は静岡大会よりも増加しており、研究者同士が直接対面し、様々な情報交換を行う大会の重要性は増しているようです。

今大会は中国四国地区の担当でしたが、第 47 回大会（2000 年）以来の広島県での開催となりました。前回は広島大学東広島キャンパスで開催されましたが、宿泊施設のある広島市街から離れているため、毎日の大会会場への移動には交通費と時間がかかり、非常に大変でした。また、今回の参加者は当時よりも 1000 名程度の増大が見込まれました。そのため、大学での開催を断念し、広島市街の中心部にある広島国際会議場で実施することに決定しました。広島国際会議場は地区内で最大のコンベンション施設であり、単一施設での実施を考えた場合、これ以外の選択肢はありませんでしたが、5 日間の開催期間中フル稼働状態で、休憩室も設置できませんでした。しかし、それでも会場不足のため、口頭発表希望者のうち 33 名をポスター発表に変更していただき、ようやく全ての発表を納めることができました。

そのような状況で、中越信和大会会長、中坪孝之大会実行委員長をはじめとして大会実行委員会の中心となった広島大学の関係者の皆さまには大変な御苦勞をおかけしました。なかでも土居秀幸さんには、3 回目の大会実行委員会委員とポスター部会、高校生ポスター部会の兼任で大活躍していただきました。また、実行委員会の方々としては広島大学のほか島根大学、鳥取大学、愛媛大学、徳島大学、香川大学、高知大学、そして大学以外の関係機関にまで広がっており、地区会レベルでの実施体制となりました。大会開催は大勢の方々のボランティアによって支えられています。皆さまのご努力・ご協力に感謝いたします。

今期の大会企画委員会の運営について

生態学会の大会運営は、主に会場管理や予算管理を担

当する大会実行委員会（地区会が担当）と、発表者管理や大会企画、発表プログラム編成を担当する大会企画委員会（全国の会員が担当）の両輪によって実施されています。このような運営形態は、増大する大会参加者と運営業務に対して、大会企画の継続性と発展性を維持するために第 52 回の大阪大会から採用されています。今期の大会企画委員会は、複数部会に所属されている方を含めて、64 名で構成されました。これだけの構成員がほとんどお互いに顔を合わせることもなく、メーリングリストと Wiki による情報共有・交換によって大会企画を組み立てていきます。この間、大会企画委員会内で交わされたメール数（大会企画委員長が受け取ったメール数）は 5000 通を超えており、非常に活発に企画活動が行われていたことがわかる一方で、運営体制が非常に大きくなっていることがわかります。

実際、現在の生態学会大会では、会員による一般発表に加えて、高校生によるポスター発表から英語による国際レベルのシンポジウム、自由討議の場となる企画集会、受賞者による記念講演、公開講演会、そして生態学会の各委員会が企画するキャリア形成や産学連携、各種講習、英文誌編集などに関わる様々なフォーラム、誰でも参加できる自由集会と、非常に多様性の高い発表が一堂に会する実施形態となっています。また、各種大会賞審査、海外からの招聘講演者の受け入れ、子連れ参加や企業からの参加への対応も充実してきました。このような生態学会大会の特徴を活かし学会の方針を反映させつつ、その一方で、物理的・社会的な制約と折り合いをつけ、企画委員会・実行委員会の個人負担の軽減をすすめていくことが、大会企画委員会としての方向性となりました。

広島大会の運営方針

運営の簡素化

残念なことに、現在のようなボランティアによる大会運営は、ほぼ限界にきています。運営を担当している大会企画委員会、大会実行委員会、そして生態学会事務局の負担は限界を超えています。地区会員から構成される大会実行委員会においては慢性的な人員不足であり、ごく少数の会員に大きな負担がかかっているのが現状です。そのため、今後とも大会を継続して運営していくためには、大会の魅力を保ちつつ、何らかの負担軽減策をとる必要があります。仮に業者に外注して実施した場合には、大会参加費の大幅な（2 倍以上の）値上げの必要性が見込まれ、多くの生態学会員にとって望ましい状況ではありません。一方、生態学会に対する社会的な期待や要請はますます高まってきており、高校生ポスター発表や公開講演会のようなアウトリーチ活動や国際化対応、将来の若手研究者の育成など様々な活動が求められていま

す。これまでの実施内容に新しい企画を積み重ねていくのではなく、現状の運営方法の簡素化を進めて、新しい取り組みと入れ替え、大会委員会の仕事を増やさない工夫が必要となっています。そのため、大会運営について、一般参加者には見えない範囲で大幅な変更を行いました。

まず、学会事務局による大会運営経費の一元的管理です。大会運営には莫大なお金の管理が必要で、大会実行委員会の会計担当の重要な仕事でした。しかし、現在の大会会計は生態学会本体の会計に一元化されており、実行委員会が管理する必要は無くなっています。そこで、実行委員会の負担を減らすため、大会会計の会場使用料、機器使用料、会場設営費、人件費、JTB 委託料等の大型の経費を学会事務局が直接管理することになりました。その結果、大会実行委員会が管理しなければならないお金が大幅に削減されると同時に、学会としても予算管理が行いやすくなりました。

また、外注できる大会業務について、アルバイトを活用することを検討しました。この時、大会企画委員会の大会実行委員会と同じ条件で雇用できるように、生態学会の雇用規定を新たに作成していただきました。企画委員会業務としては、Web ページの作成・編集、実行委員会業務としては会場での大会運営関係に活躍していただきました。

次に、長年の懸案であった要旨集冊子体及び PDF 版の作成を中止しました。2013 年 4 月 22 日付けの松田前会長からの Web メッセージでも説明していただいておりますが、講演要旨集冊子体を廃止することで、会計処理が大幅に簡素化でき、数十万円の赤字が解消され、大会の受付業務も大幅に軽減でき、受付の混雑も緩和できました。さらに、大会終了後の実行委員会の残務処理を減らすこともできました。PDF 版を廃止することで、要旨締切を約 1 ヶ月遅らせることができ、企画委員会や事務局による約 1 ヶ月間の編集作業を省略することができました。電子要旨集が使いやすく構成されていたこともあり、ほとんどの会員の方には大きな問題もなく電子媒体へ移行していただけたようです。会場内では、スマートフォンや iPad などでプログラムや要旨を閲覧している参加者が数多く見られました。

講演要旨集の廃止とは直接関係しませんが、公開講演会では、これまで出版してきた解説書籍の出版販売は行わず、同様の形式の冊子を当日参加者にのみ無料配布し、PDF ファイルを生態学会の HP から自由にダウンロードできるようにしました。これは、これまでの公開講演会で作成してきた冊子の売れ行きが不振のため、これまでのように文一総合出版から出版して書店に流通させることが困難と判断されたからです。純粹に経済的な問題ですので、今後は大会ごとに出版形態が判断されると思いますが、電子化の流れが進んでいくことが予想されます。

もう一つの簡素化は、ポスター賞の審査方法です。静岡大会までのポスター賞では、1 枚のポスターを師弟関係のない 3 名の審査員が審査し、ポスターのわかりやすさ、研究の質、発表技術についてそれぞれ 5 段階評価で採点し、得点数の高いものに授賞してきました。しかし、ポスター賞応募数が 400 件を超える現状では、審査員の確保と審査負担増大に問題が生じていました。そこで、広島大会では審査基準から発表技術をなくし、ポスターのみを評価することとしました。審査員の方々からは負担が軽減されたと概ね好評でしたが、依然として審査員の確保には限界があり、発表者の出欠確認などについても若干の問題が指摘されました。なお、今大会より、ポスター賞受賞者には、生態学会に寄贈された書籍を副賞として提供することになりました。

大会の国際化

研究の国際化・英語化が進んでいる現状で、大会発表の英語化を推進することは必然ですが、現状の多くの参加者にとって、日本語のほうが研究発表効率が高いことも事実です。国際化と唱えていても海外からの参加者が増えず、英語による発表を楽しめる環境がなければ、日本人の間だけで英語で議論するという本末転倒な状況になりかねません。そこで、生態学会の日本人以外の受け入れ状況について確認してみると、様々な問題があることがわかりました。

まず、生態学会大会で発表し、集会を企画するには正会員である必要がありますが、これまでの入会申込では、海外から日本人以外が正会員になることはほとんど想定されていないことがわかりました。特に、海外の学生が正会員になろうとする場合、学生会費が認められず一般会費を支払わなければなりません。また、海外会員には、収入が少ない若手会員の学会費の特別処置についての考慮もなされておらず、国内会員には選択可能な冊子不要割引も適用されていませんでした。これらの問題は、大会企画委員会から事務局の方に提起し、今年度から改善されることになりました。

次に、大会案内や学会案内の英語表記への対応です。英語がわかれば大会に参加できる環境を整備するために、大会案内の全面英語化を行い、Web 申込画面も日英併記としました。これまでも一部は英語による対応がなされていたのですが、集会関連については対応できていませんでした。広島大会では、海外会員 (David Inouye さん) による企画集会が初めて開催されました。

外国人会員、特に学生の大会参加は、将来の生態学会の国際化を目指す上で非常に重要です。しかし、日本に滞在中の留学生は日本生態学会に魅力を感じていないのではないかとという危惧がありました。留学生にインタビューを行った結果、自分の研究を多くの人と共有し、他の人がどのような研究をしているのかを理解できる機会、他の生態学者との交流やアドバイスが得られる機会が十分に提供されていないという意見が得られました。

また、過去のポスター賞における留学生の受賞割合は非常に低く、EAFESを除けばほとんどゼロに近い状況でした。ポスター賞の授賞対象を英語発表に優先してはどうか、あるいは留学生を対象とした分野を設定すれば良いのではないかという意見もありましたが、賞の公平性や運用上の問題もあり、今回も日本語による発表を主体とした運営となりました。

そのような中で、辻和希さんを委員長とする将来計画委員会と協同し、英語口頭発表賞を創設することができました。当初は応募者数や発表レベルが危惧されたものの、結果として国内外から43名の若手講演者が参加し、各分野の一流研究者による模範講演も行われ、大盛況のうちに開催できたことは、大会の国際化に向けた非常に大きな一歩となりました。北海道大学の八木議大さんによる刺激的なポスターは、英語による発表を楽しむ全く新しい賞というイメージ形成に役立ったと思います。また、三木健さん、久米朋宣さんには、国立台湾大学での英語発表評価経験を生かして、初めてとは思えないスムーズな評価システムを設計していただきました。国内外の若手研究者によるすばらしい研究発表が行われ、会場との活発なやり取りも含め、若手からの大会国際化を進めることができました。

トップクラスの質の高い英語発表を増やすために、学会を挙げて英語プログラムの充実が図れるような体制作りも行いました。現状では、海外からの参加者受け入れ体制が整っていませんので、海外から質の高い発表者を集めるためには積極的な働きかけが必要です。そこで、大会企画を英文誌出版事業とリンクさせ、大会運営に科研費（国際情報発信強化）を効果的に利用することにしました。これまで1～2名レベルで行われてきたシンポジウム海外研究者招聘企画をERシンポジウムとして一元化し、公募の結果、4名の研究者を海外から招聘しました。また、David Inouye次期アメリカ生態学会会長については、ER誌の編集委員も務めていただいていることから、別枠で招聘しました。拡大した招聘研究者の旅費請求手続きに対応するため、学会として旅費支払いの方法を規定しました。また、企画集会では非会員の発表を1名まで認めることにしました。

これらの英語発表強化の結果、大会発表の約1割が英語発表となり、大会期間中、英語による発表プログラムを連続して実施することが可能となりました。また、Webのプログラムページに英語発表をセレクトしたSessions in Englishや招待講演者紹介ページを作成しました。

ところで、大会の国際化が進むと、学会発表以外に新たに対応しなければことが発生します。広島大会で対応した新たな取り組みとしては、懇親会のメニューの素材を英語表記し、ヴェジタリアン用メニューを準備したことや、託児室の利用規定・申込書の英語版を作成したことなどが挙げられます。また、海外からの参加者の場合、

ご家族の参加希望も多くありました。

未来の生態学者の応援

広島大会では、静岡大会に引き続き、学部学生以下の非講演者の参加費を無料にしました。また、静岡大会から部会として定着した高校生ポスター発表会「みんなのジュニア生態学」を開催しました。生態学の社会への普及のための日本生態学会によるアウトリーチ活動として高い評価を得つつあります。広島大会では、非会員でありながら大会運営に協力していただいた広島大学の竹下俊治さんによる広報効果もあり、当初の予想を大きく上回る55件もの発表が一堂に会して大盛況のうちに行われました。また、共立出版から副賞として書籍が提供され、会場では著者の酒井聡樹さんによるサイン会が行われました。

今後の持続的な運営に向けて

新規入会者や海外からの参加者にとって、生態学会の入会・大会申込システムは、お世辞にもわかりやすいとはいえません。また、海外からの入金方法や名簿索引の表記方法についても検討する必要があります。参加費免除者（招待講演者、高校生発表、学部生など、また自由集会）に関わる費用は、一般参加者からの参加費によって賄われているので、その割合をあまり増やしすぎるわけにはいきませんが、多様な参加者が生態学会大会の魅力の源泉でもあります。なお、広島大会では、自由集会における会場管理の強化や、大会期間中の緊急事態の発生を想定した行動計画も立てられましたが、非常時の学会としての判断や対応手段には大きな課題があることがわかりました。

こうした様々な課題の中で、現在、大会企画委員会では吉田丈人委員長のもと、鹿児島大会の企画が準備されています。また、それと並行して電子情報管理・運営体制検討タスクフォースが設置され、陀安一郎さんを座長として、生態学会の効率的で持続可能な体制の構築を目指した会員管理と全国大会運営等に関連した電子情報システムの管理・運営体制の改革案が作成されています。大勢のボランティア委員の協同作業によって鹿児島大会の準備が進められています。よりよい発表舞台に世界の研究者が集まる大会を目指すには、日本の生態学者の「祭り」としての魅力、すなわち参加者が心から生態学を楽しんでいる様子が世界に伝わるのが最も大切だと思います。参加者の皆さんは1年に1回の大会にむけて準備していただき、生態学会の「祭り」に魅力的な踊り手として参加して、その数を増やしていけるようご協力お願いします。

*以下に、ポスター賞の審査をしてくださった皆さまのお名前を記して、お礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

荒木希和子、石井博、石田惣、石川麻乃、市岡孝朗、伊藤健二、伊藤浩二、岩井紀子、岩泉正和、岩西哲、岩渕

翼、上原隆司、江川知花、遠藤いず貴、大谷達也、大槻久、岡田慶一、小黑芳生、尾崎研一、尾崎洋史、片山直樹、加藤元海、壁谷大介、唐沢重考、北出理、工藤岳、栗林正俊、黒田有寿茂、桑村哲生、小池文人、幸田良介、後藤龍太郎、小柳知代、今藤夏子、近藤美由紀、酒井武、向坂幸雄、澤田佳宏、塩尻かおり、繁宮悠介、島田直明、嶋永元裕、洲崎燈子、鈴木英治、鈴木圭、鈴木俊貴、曾我部篤、曾根直幸、高見泰興、高橋明子、高橋一秋、高橋一男、竹内勇一、武山智博、立木佑弥、田中貴宏、谷川東子、津田みどり、土屋香織、津山幾太郎、遠山弘法、徳田誠、戸田光彦、富松元、中川弥智子、長坂晶子、長坂有、永野昌博、中路達郎、新妻靖章、新部一太郎、西村尚之、橋本佳延、服部充、馬場友希、早坂大亮、原山尚徳、原口岳、広木幹也、深野祐也、福山研二、藤山直之、堀江明香、前迫ゆり、蒔田明史、牧野渡、道前洋史、満尾世志人、宮竹貴久、望月翔太、森茂太、森本淳子、山尾僚、山川博美、山道真人、油田照秋、吉村謙一、渡辺誠、渡部恵司

(敬称は略させていただきました。また、このほか5名の方が匿名を希望されました。)

*以下に高校生ポスター賞の審査をしてくださった皆さんのお名前を記して、お礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

赤坂卓美、浅見崇比呂、上村章、丑丸敦史、大原雅、岡野淳一、亀田佳代子、川尻舞子、久保田涉誠、佐竹暁子、嶋田正和、高木昌興、高田まゆら、竹下俊治、種子田春彦、中井咲織、西脇亜也、根岸淳二郎、畑田彩、平山大輔、広瀬祐司、真野浩行、山北剛久、山下雅幸、山村靖夫、横井謙一、吉岡明良

*以下に英語口頭発表賞の審査をしてくださった皆さんのお名前を記して、お礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

稲垣善之、内海俊介、ECONOMO Evan P.、大串隆之、大園享司、大手信人、金子信博、黒川紘子、小林真、田中健太、辻和希、韓慶民、VARGO Edward L.、彦坂幸毅、兵藤不二夫、藤井一至、松浦健二、三木健、吉田丈人、吉村仁、和穎朗太

記 事

I. 日本生態学会大会総会（2014年3月17日、参加者約150名）において決議された事項

1. 2013年度決算

2013年度決算案が承認された。

<一般会計>

収 入 の 部			支 出 の 部		
	13 予算	13 決算		13 予算	13 決算
会費			会誌発行費		
一般会員	32,000,000	29,864,000	ER	19,500,000	10,179,121
学生会員	8,000,000	7,046,100	生態誌	5,000,000	4,158,050
外国会員	250,000	195,100	保全誌	2,300,000	1,618,000
団体会員	2,000,000	2,293,500	ニュースレター	1,000,000	968,941
賛助会員	0	0	和文誌編集費	70,000	47,152
和文誌購読	600,000	566,700	小 計	27,870,000	16,971,264
小 計	42,850,000	39,965,400	会議費	200,000	181,709
ER 売上還元金	1,305,000	1,301,955	旅費・交通費	2,500,000	2,229,530
編集事務費用	1,710,000	1,706,010	人件費	15,000,000	14,330,778
Back No. 売り上げ	0	8,000	地区会へ還元金	1,600,000	1,463,900
科研費			大会支出	23,000,000	21,032,099
国際情報発信強化 A	0	16,600,000	公開講演会	1,300,000	1,305,516
ER	0	0	INTECOL 会費	350,000	438,566
公開講演会	1,300,000	1,300,000	事務費		
小 計	1,300,000	17,900,000	通信費	800,000	742,150
出版印税	700,000	1,142,966	消耗品費	250,000	167,765
利子収入	10,000	5,359	雑費	1,250,000	146,515
広告代	280,000	300,000	銀行手数料	140,000	110,560
著作権使用料	400,000	524,443	レンタルサーバ料	413,750	403,250
ER 超過ページ代	700,000	300,216	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
大会収入	23,000,000	19,455,790	税務費用	400,000	283,500
講習会費	100,000	0	小 計	4,933,750	3,533,740
その他	0	9,000	各種委員会費	1,500,000	668,675
前年度繰越金	43,902,460	43,902,460	選挙費	400,000	731,540
			EAFES 費用	200,000	0
			講習会費	300,000	5,072
			60周年費用	200,000	81,055
			法人化準備費	1,000,000	445,850
			国際化推進費		
			ER 委託費	0	8,472,000
			会議費	0	23,420
			旅費・交通費	0	461,560
			人件費	0	195,000
			事務費	0	201,400
			小 計	0	9,353,380
合 計	116,257,460	126,521,599	次年度繰越金	35,903,710	53,748,925
単年度収入	72,355,000	82,619,139	合 計	116,257,460	126,521,599
			単年度支出	80,353,750	72,772,674

<特別会計>
特別会計Ⅰ（宮地基金）

収入の部			支出の部		
	13 予算	13 決算		13 予算	13 決算
前年度繰越金	2,501,654	2,501,654	宮地賞賞金	300,000	300,000
預金利息	0	380	雑費	1,575	1,890
			次年度繰越金	2,200,079	2,200,144
合 計	2,501,654	2,502,034	合 計	2,501,654	2,502,034

大島基金

収入の部			支出の部		
	13 予算	13 決算		13 予算	13 決算
前年度繰越金	9,134,212	9,134,212	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	0	1,440	雑費	1,155	1,365
			次年度繰越金	8,933,057	8,934,287
合 計	9,134,212	9,135,652	合 計	9,134,212	9,135,652

琵琶湖賞基金

収入の部			支出の部		
	13 予算	13 決算		13 予算	13 決算
前年度繰越金	732,266	732,266	旅費	300,000	235,100
預金利息	0	111	その他諸費用	100,000	256,326
			次年度繰越金	332,266	240,951
合 計	732,266	732,377	合 計	732,266	732,377

鈴木賞基金

収入の部			支出の部		
	13 予算	13 決算		13 予算	13 決算
寄付	0	0	鈴木賞賞金	150,000	150,000
前年度繰越金	5,000,110	5,000,110	雑費	1,575	1,575
預金利息		786	次年度繰越金	4,848,535	4,849,321
合 計	5,000,110	5,000,896	合 計	5,000,110	5,000,896

2. 任意団体日本生態学会の解散について

任意団体日本生態学会について以下の案が承認された。

- ①任意団体を解散
- ②権利義務関係を新法人に引き継ぐ
- ③財産を新法人に寄付する
- ④年度内に事務的な移行手続きが処理された段階で、解散完了とする
- ⑤地区会についても上記と同様に移行する

Ⅱ. 一般社団法人日本生態学会平成 26 年度第 2 回定時総会（第 61 回大会会員総会、2014 年 3 月 17 日、代議員 22 名・会員約 150 名参加）および全国委員会、各種委員会において報告・承認・決議された事項

A. 報告事項

1. 事務局報告

a. 2013 年度学会誌発行状況・会員数等

日本生態学会誌 63 巻

	1 号	2 号	3 号
発行部数	3100	3100	3050
配本部数	2934	3031	2952
残部数	166	69	98

保全生態学研究 18 巻

	1 号	2 号
発行部数	1500	1500
配本部数	1441	1464
残部数	59	36

Ecological Research Vol.28

	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
発行部数	2850	2750	2770	2730	2680	2700
配本部数	2740	2702	2701	2696	2680	2694
残部数	110	48	69	34	0	6

配本内訳

	日本生態学会誌		Ecological Research		保全生態学研究	
	63巻3号		Vol.28 No.6		18巻2号	
	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数	配本冊数	未配本冊数
一般会員	2171	51	2023	51	1111	23
学生会員	526	90	504	88	259	31
団体	104	0	104	0	27	0
外国個人会員	21	7	22	7	3	0
賛助	0	0	0	0	0	0
小計	2822	148	2653	146	1400	54
名誉会員	4	0	4	0	4	0
寄贈交換	56	0	37	0	55	0
購読	70	0	0	0	5	0
小計	130	0	41	0	64	0
合計	2952	148	2694	146	1464	54

会員数

	2012年12月末現在							2013年12月末現在						
	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計	一般A	一般B	一般C	学生A	学生B	学生C	合計
北海道	178	72	18	107	32	0	407	177	77	19	103	27	0	403
東北	128	44	12	65	12	4	265	129	50	10	82	16	3	290
関東	649	349	80	280	79	9	1446	665	348	81	264	82	7	1447
中部	249	151	33	130	34	2	599	248	153	35	126	33	3	598
近畿	319	174	28	176	68	10	775	292	169	30	162	70	8	731
中四国	143	71	10	51	22	5	302	141	72	8	40	19	4	284
九州	166	66	19	65	13	0	329	166	69	19	56	15	0	325
小計	1832	927	200	874	260	30	4123	1818	938	202	833	262	25	4078
団体				A 87	B 22	C 4	116				A 82	B 21	C 4	107
国外一般							52							35
賛助							1							0
名誉							4							4
小計							173							146
合計							4296							4224

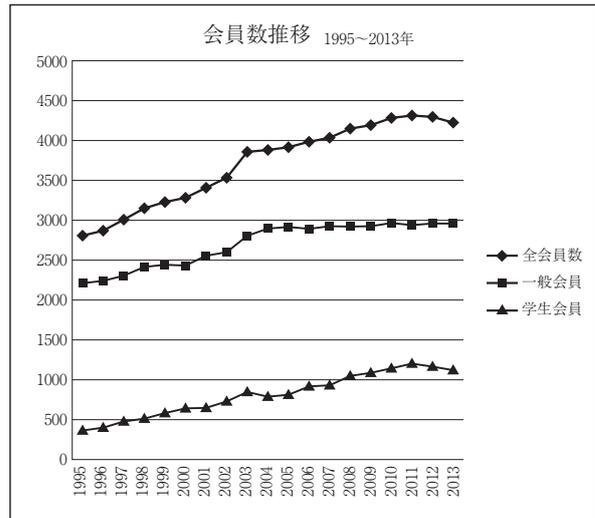
会費納入率（各年12月末現在）

	2012年		2013年	
	一般	学生	一般	学生
北海道	97.8	72.7	91.2	77.8
東北	95.1	87.7	91.0	73.3
関東	94.2	80.4	89.6	74.5
中部	94.2	79.5	91.5	72.8
近畿	94.2	86.2	91.2	74.6
中四国	94.2	82.1	97.3	68.5
九州	93.2	83.3	92.1	84.1
平均率	94.7	81.7	92.0	75.1

雑誌不要者数変遷（各年12月末）

	一般					学生				
	AB会員数	生態誌不要	ER不要	AB会員数	生態誌不要	ER不要	AB会員数	生態誌不要	ER不要	
2008	2725	107	4%	146	5%	1021	80	8%	85	8%
2009	2740	171	6%	215	8%	1061	148	14%	157	15%
2010	2582	321	12%	419	16%	952	221	23%	239	25%
2011	2738	371	14%	478	17%	1175	339	29%	364	31%
2012	2760	478	17%	606	22%	1135	407	36%	431	38%
2013	2757	531	19%	679	25%	1097	477	43%	501	46%
2014	2618	565	22%	727	28%	1009	457	45%	483	48%

* 2014年は2/14現在



b. 庶務報告（2013年4月～2014年3月）

1. 文部科学省へ平成24年度科研費（公開講演会）実績報告書を送付した（4月3日）
2. 日本学術振興会より平成25年度科研費（公開講演会）の内定通知があった（1,300,000円）（4月17日）
3. ESJ61（広島）での大会講演要旨集の紙媒体・PDF版の廃止を学会HP「会長メッセージ」に掲載した（4月22日）
4. 京都事務局にて法人化に向けて税理士および会計士と懇談を行った（4月19日）
5. 日本学術振興会より平成25年度科研費（国際情報発信強化A）の内定通知があった（5年間交付、H25年度16,600,000円）（5月16日）
6. 日本学術振興会へ平成24年度科研費（出版助成金）実績報告書を送付した（5月22日）
7. 日本生態学会各賞（学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞）の応募を開始した（6月1日）
8. 来年からのC会員廃止に伴い、C会員への入会依頼および変更届を送付した（6月4日）
9. 自然保護専門より提出の「千葉県印西市そうふけっばら要望書」へ専門委員長の印を押印し送付した（6月11日）
10. 生科連の「日本版NIHに関する緊急声明」に会長名で賛同した（6月10日）
11. 全国委員会へ生態学会各賞選考委員会の新規委員3名の推薦を依頼し、全国委員の推薦をもとに決定した（6月24日）
12. 滋賀県にて第17回生態学琵琶湖賞授賞式および受賞記念講演を行った（7月6日）
13. 新会員管理システムを発注した（7月12日）
14. 学会の税務に関して文平・山本事務所と顧問契約を交わした（8月1日）
15. 新会員管理システム導入に向けての打合せを業者と行った（8月30日・9月10日）
16. 選挙管理委員候補高原光氏・鳥居厚志氏が全国委員により承認された（9月8日）

17. 収入の少ない若手会員への措置について 2014 年分を締切った（申請者 7 名）（10 月 31 日）
 18. 次々期会長および次期全国委員選挙の開票を事務局にて行った（11 月 5 日）
 19. 学術振興会に平成 26 年度科研費（研究成果公表表）計画調書等応募書類一式を送付した（11 月 12 日）
 20. 学会賞選考委員に推薦された学会賞・宮地賞・大島賞・奨励賞（鈴木賞）候補者が全国委員会にて承認された（11 月 18 日）
 21. 和文誌電子投稿システム導入への打合せを行った（11 月 23 日）
 22. C 会員への次年登録の確認連絡を行った。（11 月 26 日）※ C 会員変更内訳 正会員 30 保全誌購読 158 退会 31 計 219
 23. 全会員へ 2014 年会費請求を行った（12 月 4 日）
 24. 法務局へ登記を行い、一般社団法人日本生態学会が成立した（12 月 9 日）
 25. 日本学術振興会に平成 25 年度科研費（国際情報発信強化 A）状況報告書を送付した。（1 月 17 日）
 26. 日本生態学会誌編集幹事 3 名および委員候補 26 名が全国委員により承認された（1 月 17 日）
 27. 一般社団法人日本生態学会設立時社員総会をメールにて行い、第 1 号議案（平成 25 年度の事業報告及び決算の件）、第 2 号議案（入会の基準及び会費に関する事項）が全会一致で承認された（1 月 24 日）
 28. 一般社団法人日本生態学会設立時理事会をメールにて行い、第 1 号議案（理事会規則の件）、第 2 号議案（旅費規則の件）、第 3 号議案（役員・代議員選任規則の件）、第 4 号議案（平成 26 年度代議員選挙当選者の件）、第 5 号議案（平成 26～27 年度期理事及び監事候補者推薦の件）、第 6 号議案（平成 26 年度第 1 回定時社員総会開催の件）が全会一致で承認された（1 月 25 日）
 29. 一般社団法人日本生態学会第 1 回定時総会をメールにて行い、第 1 号議案（理事・監事の選任の件）、第 2 号議案（代表理事・会長候補齊藤隆氏推薦の件）、第 3 号議案（専務理事・庶務担当理事・会計担当理事の任期短縮の件）が全会一致で承認された（1 月 26～28 日）
 30. 一般社団法人日本生態学会第 1 回通常理事会をメールにて行い、第 1 号議案（理事代表理事・会長及び業務執行理事の選任の件）が全会一致で承認された（1 月 29～30 日）
 31. 第 12 回日本生態学会功労賞候補者伊東宏樹氏が全国委員により承認された（1 月 29 日）
 32. 一般社団法人日本生態学会平成 26 年度第 2 回通常理事会を東京にて行い、会則の件、各種委員の選任の件が賛成多数で承認された（2 月 23 日）
- * 他、各種集会へ後援・協賛名義使用承認 8 件、論文図表等の転載 7 件
- c. 会計報告（2013 年 3 月～2014 年 2 月）**
1. シュプリンガー社より 2012 年度売上還元金として 1,450,000 円及び ER 編集事務費用 1,900,000 円の入金があった（4 月 25 日）
 2. シュプリンガーへ 2013 年 1・2 号分の出版費として 5,313,000 円を支払った（5 月 21 日）
 3. 東京化学同人より生態学入門 2 版の印税 359,520 円（500 部:2 月 25 日）・249,150 円（1000 部:6 月 25 日）の振込があった。
 4. 第 17 回宮地賞 3 名・第 6 回大島賞 2 名の受賞者へ賞金 10 万円、第 1 回奨励賞（鈴木賞）受賞者 3 名へ 5 万円を送金した（3 月 21 日）
 5. 各地区会へ 2013 年前期分の地区会費と地区還元金を支払った（7 月 17 日）
 6. 科研費（国際情報発信強化 A）前期分として 4,000,000 円の入金があった（7 月 19 日）
 7. 土倉事務所へ保全生態学研究 18-1 印刷費として 1,055,250 円を支払った（8 月 2 日）
 8. 土倉事務所へ生態誌 63-1 印刷費として 1,855,350 円を支払った（8 月 2 日）
 9. 土倉事務所へ生態誌 63-2 印刷費として 1,552,950 円を支払った（9 月 18 日）
 10. 東京化学同人より「生態学入門 2 版」印税として 282,336 円が振り込まれた（9 月 25 日）
 11. 事務局員の退職給付金を支出した（10 月 1 日）
 12. 各科研費（国際情報発信強化 A）後期分として 12,600,000 円の入金があった（11 月 8 日）
 13. みずほファクターの口座引落しにより 462 名分の次年度会費 5,114,400 円の入金があった（12 月 12 日）
 14. INTECOL 年会費 1 年（2013 年）分として 438,566 円を送金した（12 月 24 日）
 15. 土倉事務所へ生態誌 63 巻 3 号印刷代として 1,281,000 円を支払った（12 月 27 日）
 16. 土倉事務所へ保全誌 18 巻 2 号印刷代として 1,149,750 円を支払った（12 月 27 日）
 17. シュプリンガーへ 2013 年 3-6 号分の ER 編集委託費として 10,513,300 円を支払った（12 月 25・27・30 日・1 月 9・10・15・16 日）
 18. (株) データホテルへサーバ年間利用料として 398,000 円を支払った（1 月 27 日）
 19. 2013 年度の会計監査が学会事務局で行なわれ、会計は適正に行なわれたことが確認された。（2 月 6 日）
 20. 各地区へ 2013 年後期分の地区会費および地区還元金を支払った（2 月 7 日）
- 2. 大会企画委員会**
- a. 広島大会（ESJ61）概況（3 月 10 日現在）**
- ・公式集会数 49 件
 - ・シンポジウム 17、フォーラム 7（内ポスター 1）、企画集会 25
 - ・一般講演数 1216 件 口頭発表 214 件（内英語発表賞応募 43）ポスター発表 1000 件（内ポスター賞応募 462）高校生ポスター発表 55 件
 - ・参加申込者数 1509 人、懇親会参加 505 人（JTB-Web 登録者）3/16 現在参加者数約 2100 名
 - ・日本生態学会第 17 回公開講演会「里山のこれまでとこれから」

- ・非公式集会数（自由集会）30件
- ・企業展示・書籍販売 全部で22件の申し込み（協賛費112万円）
- ・託児室利用25名（内外国籍2名）
- ・問い合わせ件数129件
- ・ERシンポジウム招聘講演者4件
Nathan G. Swenson (Michigan State University), André de Roos (University of Amsterdam), Kostas Triantis (University of Athens), Janis L. Dickinson (Cornell University)
- ・特別ゲスト（ESA会長、ER編集委員）
David W. Inouye (University of Maryland)
- ・招待講演者23人（内1名キャンセル）

b. 今期に実施したこと

- ・実行委員会の負担を減らすため、大会会計の会場使用料、機器使用料、会場設営費、人件費（アルバイト代）、JTB委託料等の大型の経費（広報・協賛は除く）を日本生態学会事務局が管理することにした。
- ・冊子体とPDF版の講演要旨集の作成を取りやめ、大会ページからHTML版講演要旨をダウンロードできるようにした。それに伴って、要旨締切期限を約1ヶ月遅らせた。
- ・昨年同様、学部学生以下の参加費を無料化した（当日参加のみ、学生証提示）。
- ・公開講演会では、これまで出版してきた書籍の出版販売は行わず、当日参加者にのみ無料配布し、書店販売による流通を行わない代わりに、pdfファイルを生態学会のHPから自由にダウンロードできるようにした。
- ・シンポジウム海外研究者招聘企画をERシンポとして一元化し、招聘人数を増やした。また、拡大した招聘研究者の旅費請求手続きを学会として共通化（生態学会旅費規程に準拠）した。
- ・会場不足のため、口頭発表希望者のうち33名をポスター発表に変更してもらった。
- ・海外からの会員が大会に参加できるような体制の整備を進めた。
 - ◇大会案内を全面英語化し、Web申込画面も日英併記とした。
 - ◇プログラムページにSessions in Englishを作成した。
 - ◇海外会員（David Inouye氏）による企画集会が初めて開催された。
 - ◇鹿児島大会より、海外会員も国内会員と同様の会員待遇（学生会員、冊子無し会員）を選択できるようにした。
 - ◇懇親会のメニューの素材を英語表記すること、およびヴェジタリアン対応を行った。
 - ◇託児室の利用規定・申込書の英語版を作成した。
 - ◇大会参加に関わるInvitation letterの発行（事務局）、PDF版は無料、紙媒体も発行した。
 - ◇大会期間中、英語による発表プログラムが連続して実施されるように配慮した
 - ◇Attendant参加（海外講演者の同行者）への対応
- ・将来計画委員会と協同し、英語口頭発表賞を企画し、実施した。
- ・大会企画を英文誌出版事業とリンクさせ、大会運営に科研費（国際情報発信強化）を効果的に利用した。

- ・英文誌のPD編集委員に依頼し、招待講演者の紹介ページを作成した。
- ・ポスター賞の審査方法を簡略化し、運営や審査員の負担軽減を試みた。また、国際化対応として、英語による理解が可能なポスターを推奨した。
- ・ポスター発表では、生態学会に寄贈された書籍を副賞として提供した。高校生ポスター発表では、共立出版から副賞として書籍が提供された。
- ・大会Webシステム改訂作業の一部を学生バイトに委託した。
- ・プログラムの諸案内に、大会運営委員会からのメッセージを追加した。

c. 鹿児島大会（ESJ62）準備状況

- ・第62回日本生態学会鹿児島大会は、2015年3月18日（水）～22日（日）の期間に、鹿児島大学において開催を予定している。九州地区会員により実行委員会を組織し、吉田丈人企画委員長のもと、次期体制への引継ぎ・調整を始めている。

【検討事項】

- ・大会運営の簡素化
- ・発表者の定義：登録者と発表者の不一致、ポスター講演における発表者不在の扱い
- ・参加費免除者増大に対する対応、特に高校生ポスターへの対応（高校生ポスター部会）
- ・英語口頭発表賞の実施形態（英語口頭発表部会）
- ・フォーラムの日程調整過程の改善（シンポ部会）
- ・名簿索引の表記問題、学会員名簿も含めてアルファベット順の並びを基本とする？（学会事務局、運営部会）
- ・大会発表者の参加費の締切時期（運営部会）
- ・Invitation letterの申請方法の明示および手数料・送料負担の明確化（学会事務局）
- ・海外からの入会・大会参加の受入体制の改善（大会企画委員会、学会事務局）
- ・大会運営改革：タスクフォースの設置（学会執行部）

d. 東北大会（2015年度）の準備状況

大会会長 中静透、実行委員長 占都城太郎、企画委員長 半谷吾郎で実施予定。来年度の企画委員会に、東北地区関係者が加入

（文責：久米篤）

3. Ecological Research 刊行協議会

日時：2014年3月14日（金）14:00 - 16:00

場所：広島国際会議場（第61回大会）I会場

出席者：久米篤（EIC）、鈴木準一郎（ME）、福井学、宮下直、大手信人、野田隆史、井鷲裕司、金子信博、三木健、陀安一郎、富松裕、辻和希（以上AEIC）、梶光一、菊沢喜八郎、工藤岳、佐藤一憲、陶山佳久（幹事長）、梅木清、北村俊平、松崎慎一郎、村岡裕由、中路達郎、David W. Inouye（以上HE）齊藤隆（会長）、松田裕之（前会長）、可知直毅（前EIC・次期会長）、平口愛子、三好陽子（以上Springer Japan）堀池由紀美、青島裕子（以上EC）

議題：

a. 事務局報告

- ・編集状況について

・ 出版社報告（シュプリングーより）

b. Ecological Research Award 2013 受賞論文について
受賞論文（全3編）

- 1) Buntarou Kusumoto, Tsutomu Enoki, Yasuhiro Kubota
Determinant factors influencing the spatial distributions of subtropical lianas are correlated with components of functional trait spectra. Ecological Research, Volume 28 (2013), Issue 1, p. 9-19
- 2) Elizabeth E. Crone
Desynchronization and re-synchronization of reproduction by Astragalus scaphoides, a plant that flowers in alternate years. Ecological Research, Volume 28 (2013), Issue 2, p. 133-142
- 3) Sayaka Takahashi, Naoki Okada, Tadashi Nobuchi
Relationship between the timing of vessel formation and leaf phenology in ten ring-porous and diffuse-porous deciduous tree species. Ecological Research, Volume 28 (2013), Issue 4, p. 615-624

d. 科研費申請「国際情報発信力強化」について

e. 編集について

- ・ Provisionally Accept, Forum
- ・ 現在の編集プロセス
- ・ Aims and Scope と Instructions for Authors の改定、委員会内規の作成
- ・ OA（Open Choice）論文について

f. Special feature 企画について

g. 編集委員の交代について

h. その他

（文責：久米篤）

4. 日本生態学会誌刊行協議会

日時：平成 26 年 3 月 14 日（金）14:00～16:00

場所：広島国際会議場 楽屋①

a. 報告事項

① 出版状況

i) 投稿、審査状況（2014 年 3 月 10 日現在）

年	原著 受付	総説 受付	原著・総説			特集			学術 情報	連載
			受理	却下	審査中	受付	受理	審査中		
2014	3				3	1 (5編)		1	1	2
2013	6	3	1	5	3	5 (29編)	33 (17)	22 (12)	5	5
2012	1	2	3	0	0	4 (22編)	44 (22)	0	2	6
2011	5	3	4	4	0	3 (24編)	33 (23)	0	0	8

ii) 刊行状況

64 巻（2014 年）刊行状況

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その 他・ 記事	合計	頁数
1	0	0	2 (11編)	1	2	1	14	100

63 巻（2013 年）刊行状況

号	原著	総説	特集	学術 情報	連載	その 他・ 記事	合計	頁数
1	1	0	2 (12編)	2	2	0	17	156
2	0	2	1 (7編)	2	1	1	13	130
3	0	1	1 (6編)	1	2	0	10	98
計	1	3	4 (25編)	5	5	1	40	384

iii) CiNii から論文閲覧状況（Full Text PDF のページを閲覧した数）

雑誌	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
植物生態学会報	420	816	1,040	983	717	887	766
日本生態学会誌	11,428	38,305	45,340	44,288	45,878	50,171	76,550
保全生態学研究	1,249	8,306	10,307	13,394	18,325	19,766	18,542
合計	13,097	47,427	56,687	58,665	64,920	70,824	95,858

② 和文誌電子査読システム（Editorial Manager）導入について

（株）アトラス社と契約。日本生態学会誌と保全生態学研究の2誌で同じサイトを利用した電子査読システム（Editorial Manager）導入を準備中。

【導入スケジュール】

2月23日～5月16日 試行運用

5月30日 本運用開始

b. 審議事項

① 投稿規定改定について（主な改訂箇所抜粋）

編集方針 日本生態学会誌は、【一般社団法人】日本生態学会が定期的に刊行する和文の生態学の研究・情報誌であり、生態学の発展と普及を図ることを目的とし、和文で刊行することによって、その情報が広く効率よく伝わる記事を扱う。

記事の区分

(4) 技術報告：新知見を有する生態学的な技術開発の報告【に関する論文】。

投稿資格 記事の第1著者および特集の企画者は、正会員【のうちA会員及びB会員】に限る。共同執筆者にはそれ以外の者を含むことができる。ただし、編集委員会が認めたときはこの限りではない。

特集の企画 特集の企画を提案する際には、企画者の氏名、所属、連絡先（電子メール、電話、FAX、住所）と特集のテーマ、執筆予定者（執筆者の了解を得ておくことが望ましい）、特集を組むことの意義と各論文の要旨（あわせて2000字程度）【←論文の査読及び編集作業にどの程度寄与できるかを記した文章】を、電子メールで学会事務局日本生態学会誌担当宛に送付する。

投稿の方法 原稿の全てを1つのpdfかMSWordファイル、または図だけのファイル（pdf、MSWord、jpegまたはtiff）とその他のpdfかMSWordファイルの2つにま

とめて、電子メール（3MB以内）で送るか、電子記録媒体に保存し郵送する。

【2014年中に電子投稿システムを導入予定である。システム導入後論文については、投稿画面の指示にしたがい、原稿ファイル（本文、図、表など）をアップロードする。】

著作権（複製権、公衆送信権） 著作権（複製権、公衆送信権）は【一般社団法人】日本生態学会に帰属する。図表の転載は学会の許可を受けること。

規定の改訂 「編集方針」「記事の区分」「投稿資格」「査読」「著作権」および「規定の改訂」などの重要事項の改訂については、【全国委員会 理事会】の承認を必要とする。ただし、これらを除く軽微な変更については、日本生態学会誌編集委員会の議を経て行い、【全国委員会 理事会】に報告する。

（文責：古賀庸憲）

5. 保全生態学研究刊行協議会

日時：2014年3月14日 11:45～

場所：広島国際会議場 楽屋

出席者：角野康郎（編集委員長）、西廣淳（編集幹事）、三橋弘宗（編集幹事）、小池文人、高田まゆら、早矢仕有子、山本智子、横溝裕行、橋口陽子（編集事務）、伊藤貴子（土倉事務所）

a. 報告事項

① 18巻（2013）の発行状況

1号（5月）原著6、調査報告2、計8編

2号（11月）原著6、調査報告1、実践報告2、総説1、意見1、計11編

② 投稿・編集状況

2013年投稿・編集状況

	原著	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	意見・他	合計
新規投稿	20	1	8	4	0	0	1	34
受理	8	0	1	2	0	0	1	12
却下・取下	6	0	1	1	0	0	0	8
審査中	6	1	6	1	0	0	0	14

	原著	総説	調査報告	実践報告	解説	保全情報	意見・他	合計
植物	11	1	5	1	0	0	1	19
動物	3	0	3	2	0	0	0	8
植物・動物	0	1	0	0	0	0	0	1
その他	5	0	0	1	0	0	0	6
投稿総数	19	2	8	4	0	0	1	34

2012年新規投稿数28編：受理21編、却下・取り下げ7編

2011年新規投稿数32編：受理25編、却下・取り下げ7編

2010年新規投稿数24編：受理20編、却下・取り下げ4編

③ 19巻1号編集状況（3月7日現在）

原著5編、調査報告3編

④ C 会員制度廃止の影響

2013/01	B				C	計
	生・E・保	生・保	E・保	保	保	
一般	747	43	0	100	195	1085
学生	211	9	1	38	21	280
外国	0	0	0	1	1	2
名誉	4					4
購読1・2		3	0		4	7
団体	21				3	24
計	983	55	1	139	224	1402

2014/01	生・E・保	生・保	E・保	保	計
一般	735	63	0	119	917
学生	191	10	1	35	237
外国	0	0	0	3	3
名誉	4				4
購読1・2		3	0	151	154
団体	19				19
計	949	76	1	308	1334

注）停止・宛先不明を含む全保全誌送付者（寄贈交換は含まず）。

b. 審議事項

① 電子投稿システムの導入について

～5/16 投稿・査読・審査の試行運用

5/30～ 本運用開始

* 移行期間：従来通りの投稿にも対応

② 電子投稿システムの導入による投稿規定の改定について

③ 次期編集委員会について

c. その他

① 投稿促進の取り組み

② 保全誌掲載論文の引用状況調査

（文責：角野康郎）

6. 自然保護専門委員会

日時：2013年3月14日（金）11:45～13:45

場所：広島国際会議場 1会場

出席委員：現委員15名・次期委員予定者3名：露崎、紺野、吉田、井田、和田、井上、逸見、増澤、竹門、加藤、横畑、村上、立川、安溪、矢原（次期委員）須賀、金子、阿部

a. 審議および承認事項

① 2013年度活動費支出（1～12月）報告および2014年度活動費予算

2013年度活動費136,000円（細見谷・上関アフターケア活動費）

2014年度予算130,000円（アフターケア活動費）

② 要望書および意見書提出への取り組み（特になし）

③ 次期委員（地区選出委員および専門別委員）について地区選出委員

<九州・沖縄地区委員>欠員1名について早急に地区会で検討することとなった。

専門別委員

<交代> 遺伝子担当：阿部晴恵（旧：陶山佳久）
<交代> エコツアーリズム：吉田正人（旧：立川賢一）
<新設> MAB（ユネスコエコパーク）担当：井田秀行
<変更> 高山・亜高山・MAB 担当 → 高山・亜高山担当（MAB を独立させた。委員交代はなし）

④ 次期役員（正副委員長・幹事）の選出について

<委員長> 加藤真
<副委員長> 吉田正人
<副委員長> 井田秀行
<幹事> 須賀丈

副委員長を2人体制にした。旧役員の協議により選出し、委員会によって承認された。

b. 報告事項

① 自然保護専門委員会の活動報告（2013年3月～2014年3月：下記要望書・意見書提出）

② 要望書・意見書等の提出

- 1) 中池見湿地への新幹線敷設計画に対して、新たな環境影響評価調査を求める要望書（2013/3/14 提出）（加藤委員）
- 2) 沖縄県名護市辺野古・大浦湾の米軍基地飛行場建設に伴う埋め立て中止を求める要望書（2013/3/14 提出）（加藤委員）
→ 以下の意見を踏まえ、逸見委員と加藤委員で対応する。
→ 国レベルでジュゴンを守る方策を考えるべきである。
→ 近海の手砂が埋め立て土砂として大量に使われれば、砂堆の生物多様性の危機を招く可能性がある。ので留意する必要がある。
→ 利権が絡み、難しい問題だが当該委員会で取り組むべき課題である。海砂採取問題に対しては自然保護委員会名で意見書を出すべき。

- 3) 絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）改正に対する意見書（2013/3/15 提出）（吉田委員）
- 4) 印西市の草地環境「そうふけっぱら」の自然の保全を求める要望書（2013/6/13 提出）（吉田委員）
- 5) 「外来種被害防止行動計画・侵略的外来種リスト」に対する意見書（2013/11/11 提出）（村上委員）
- 6) 有明海奥部の貴重な生物相と生態系機能を保全する見地から諫早湾の潮受け堤防の排水門開放を求める要望書（2013/12/20 提出）（加藤委員）

③ アフターケア委員会報告

- ・ 魚釣島問題アフターケア報告（横畑委員）
- ・ 淀川問題検討委員会（村上委員）
- ・ 上関アフターケア報告（安溪委員）

④ 各担当委員からの報告

- ・ ネオニコチノイド系の農薬について（安溪委員）
→ 自然保護専門委員会要望書（厚労省・農水省宛）として検討を進める。
→ EU で使用禁止となった浸透移行性のネオニコチノイド系農薬の禁止の要望および残留基準緩和を行わないことの要望を検討する。
- ・ 南アルプスユネスコエコパークと JR リニア新幹線

について（増澤委員）

→ ユネスコエコパーク登録検討委員会より意見書を提出する予定である。保全関係の規制のない私有地のため、交渉状況によっては自然保護専門委員会からの要望書を検討する。

⑤ その他

→ 亀岡アユモドキ生息地へのスタジアム建設問題について近畿地区自然保護専門委員会でも対応しているが、生態学会自然保護専門委員会として要望書を出す可能性がある。

（報告：矢原徹一）

7. 外来種検討作業部会

開催日：2014年3月14日 9時半～11時半

場所：広島国際会議場1会場

出席者：村上・石田・池田・江口・大河内・五箇・立川・常田・増澤・横畑・富山・可知（12名）

a. 審議事項

① メンバーについて

小笠原関係で大河内さんが入って頂いたので、可知さんの代わりに川上和人さんに入って頂く。

② 外来種リスト作成および外来種被害防止行動計画の経過報告と審議

愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成および外来種被害防止行動計画策定の両会議は、24年度以来継続して論議されており、昨年各分類群など関係学会への素案についてのパブコメが行われた。これに対して昨年11月に当部会と自然保護専門委員会の連名で要望書を提出した。当初今年度末に上記両委員会とも結論を出す予定であったが、産業利用の外来種の取り扱いなどで調整に時間がかかり、予定を変更して、今年の夏を目途にまとめることとなった。

1) 愛知目標達成のための侵略的外来種リスト作成について

現在、パブコメへの対応を含めた案の作成途中であるが、リスト種の選定基準等について論議を行った。また、産業利用外来種の取り扱いに関して、利用者サイドからは、侵略的外来種リストという名称で、産業利用の外来種が入るとイメージが悪くなるので、リストの名称を変更するか、リストの中で別扱いせよとの強い要望がなされているので、この取り扱いに関しても論議を行った。また、現在の案では備考欄等は誤りが多いので修正を申し入れる。

2) 外来種被害防止行動計画策定について

外来種被害防止行動計画の素案の検討を行った。議論となった主なことは、普及啓発の内容とくに小・中・高等学校や大学の教育に関する事、および今後外来種対策に必要な調査や研究を、生態学会としてもっと推し進めるべきであること等のことである。

白山でコマクサを勝手に植えた人がいて、その抜き取り作業を行っているが、抜くことに反対の人もいて問題となっている。具体的事例としてコラムで入れて、一般の人への普及啓発に資すること等を提案する。

今後も可能な範囲で、委員会の情報を流して部会委

員からのコメントを貰うと共に、必要な場合には作業部会として要望書の作成なども検討する。

3) 外来生物ハンドブックについて—昨年の継続

現在愛知目標の達成のための取り組みが行われつつあり、外来種問題を取り囲む状況は大変流動的である。日本生態学会として、今回出版する本の出版目的の明確化が必要で、将来ベースとなるような本を作るために、現在の章構成なども再検討の必要がある。当面上記リスト作成と被害防止行動計画の策定に協力しながら、継続して原案の作成に当たることとする。

(文責 村上興正)

8. 将来計画専門委員会

a. 重要な議題

- ①緊急を要する学会の提言に関する明示的ルール作りに関し議論。後日、事務局が会員に説明する。
 - ②社団法人日本生態学会が早急に取り組むべき活動の方針
 - ・アジェンダの文案を議論。次世代育成、国際情報発信力強化、社会応用、普及教育などがキーワードになる予定。今後全委員会に回覧し検討を依頼する。
 - ③学会のさらなる国際化のため本委員会として以下の提案をする。
 - ・開発途上国からの年次大会参加者向けの(1)低額大会費、(2)旅費援助奨学金、(3)低額年会費の設定。
 - ・大会の招待研究者の数のさらなる増加。
 - ・次回EAFES大会もESJとの共同開催が望ましい。
 - ④その他
 - ・学会のWebsiteにセミナーやサマースクールなど生態学関連のイベント情報一度に知ることがきるポータルサイトの開設。
 - ・科学研究上の不正に関する会員の啓蒙の必要性：学会執行部主催のフォーラムを次回大会で実施するよう提言。
- (文責：辻和希)

9. 生態教育専門委員会

日時：2014年3月14日(金) 14:00～16:00

場所：広島国際会議場 B2F スタッフ控え室5

出席：西脇、浅見、嶋田、畑田、平山、中井、亀田、中田、白川

a. 議題

- ①高校教員枠の新委員(増員)について
生態学教育専門委員会から理事会に宮田理恵(神戸女学院)の新委員への就任承認を依頼することが了承された。
(委員構成については役員一覧参照)

b. 協議題・報告事項

- ①生態学会教育専門委員会のHP(HP設計、予算、依頼先など)を協議した。
- ②生態学実習ガイドブック Web版の内容を協議した。
生態学の実験・実習テーマを募集し、査読・改訂後にHPに順次、アップする計画を昨年3月の生態学教育フォーラムで公開し、委員による実習ガイドの雛形作成や生態学教材用HP試行版を作成した(11月の委

員会合宿やメール会議)。実用に耐える生態学教材用HPの構築に必要な経費を12月の常任委員会に提案し2014年度予算で執行することが了承された。2014年3月14日の委員会でも上記が議論された。15日の「アウェイの生態学」とのジョイント企画フォーラム「生態学教育ネットワークを築く」でも議論予定。

- ③株式会社リバネス主催のサイエンス・キャッスル(中高生のための学会)への学会の後援の件で当委員会の参画可能性を検討した。
- ④生態学教育フォーラムの内容について協議した。
- ⑤高校生ポスター部会委員として亀田委員に替わり中井委員が、西脇委員が高校生ポスター部会副部長として加わることが了承された。

(文責：西脇亜也)

10. 生態系管理専門委員会

開催：2014年3月14日 日本生態学会広島大会 G会議室

出席者

委員：竹門康弘、津田智、角野康郎、鎌田磨人、国井秀伸、古賀庸憲、中越信和、中村太士、西廣淳、日鷹一雅、逸見泰久、谷内茂雄、矢原徹一、山田俊弘

オブザーバー(次期委員)：白川勝信、西田貴明、橋本佳延、松田裕之

a. 報告

- ①自然再生講習会の報告
2013年11月4-5日に広島県世羅町で実施した第6回自然再生講習会「地元の生物多様性のこだわり方、活かし方～生き物ブランドのノウハウ」について報告があった。
- ②東北三県・林野庁への申し入れに関する報告
2012年10月26日に岩手県・宮城県・福島県の各知事に対して提出した「津波被災地での防潮堤建設にあたっての自然環境への配慮のお願い」および2013年9月25日に林野庁東北森林管理局長に対して提出した「仙台湾岸での海岸防災林造成にあたっての自然環境への配慮のお願い」について報告があった。

③麻機遊水地の状況報告

麻機遊水地自然再生事業について、静岡県および静岡市との連絡状況について報告があった。

- ④生態系と社会に関する学会間ネットワークについて
東北の津波被災地の復興と関連して他学会等との連絡状況について報告があった。

b. 審議

- ①次期委員会の体制について
(委員構成については役員一覧参照)
- ②内規の改正について
改定案を作成し、今後、欠席した委員の意見も踏まえ、理事会に提案することとした。
- ③2014年度自然再生講習会
第7回自然再生講習会を、京都市宝が池公園およびその周辺の里山を対象に、「都市緑地の自然再生—京—の里山の再生と活用」(案)をテーマとして実施する方針とした。

担当：鎌田磨人、竹門康弘、橋本佳延、西田貴明

④東日本大震災等への対応

「緑の防潮堤」や国土強靱化計画について情報を収集し、必要に応じた対応をする方針とした。

担当：中村太士、平吹喜彦、西廣淳

⑤今後の活動

今後、自然再生と生態系管理に関する課題の整理と指針の作成を議論する会議を設け、自然再生ハンドブックの改訂やその他の活動について議論することとした。

(文責：竹門康弘)

11. 大規模長期生態学専門委員会

出席者：日浦勉（北大）、大手信人（東大）、三枝信子（国環研）、正木隆（森林総研）、黒川紘子（東北大）、鈴木智之（東大）、中村誠宏（北大）

a. 報告事項

- ・委員会主催フォーラム 15日 18:00-20:00 D会場 「君にも書ける！エコリサ・データペーパー講座」
- ・JaLTER-All Scientist Meeting 開催：2014年9月28-30日 京都大学芦生演習林
JaLTER サイトを利用している全ての人が参加可能
内容：シンポジウム、ポスター研究発表、データ入力キャンプ&解析、フィールド技術講習、研究計画立案等
- ・マスタープラン2014申請：京都大学生態学研究センターをコアに JaLTER ネットワークを用いて研究マスタープランに掲載されたが、重点大型研究計画には残らなかった。

b. 各ネットワークの最近の動き

- ・林野庁4kmメッシュデータ完全公開に向けて少しずつ動き出している
- ・GLP 正式に Future Earth へ移行手続き、Open Science Meeting 開催 2014年3月19-21日 ドイツ
- ・TLY データ利用、論文化過程で問題発生。データ利用方法の簡略化検討
- ・アジアフラックス スーパーサイトでの多角的な解析と多地点広域化の方向性
- ・IUFRO 新たに Long-term Research on Forest Ecosystem Management in North East Asia という Division 設置

(文責：日浦勉)

12. 野外安全管理委員会

出席者：鈴木、大館、石原、粕谷、奥田、北村、飯島、

a. 2013年度活動報告

- ・野外調査安全管理マニュアル出版準備
編集中のいくつかの図と写真を除き版下整備がほぼ終了。
- ・2013年大会において、ランチョンセミナーを実施した。野外調査の初心者等を主な対象とした安全対策の啓発を目指した。スライドの公開を目指している2014年大会でのランチョンポスターフォーラム
- ・14年度の大会でのランチョンポスターフォーラムの準備を進めた。

b. 2014年度活動予定

・野外調査安全管理マニュアル出版

索引項目の拾い上げ（新年度～連休明け）、リンクチェック等を4月以降に分担して行う。秋に脱稿する。

- ・2015年大会でランチョンセミナーを実施し、そこの資料を公開について議論と準備を進める。
- ・2015年大会でのランチョンセミナー
- ・野外調査の初心者等を主な対象とした安全対策の啓発と研究室運営者を対象とした組織的な安全対策啓発のためのランチョンセミナーを次年度も企画・実施する。特に、研究室運営者向けの情報発信を工夫する。
- ・事故情報収集のための提供依頼

全国委員の所属や近傍の機関などで、野外調査中の事故が起きた場合は、その情報を野外安全管理委員会にご連絡いただけるようお願いしたい。

(文責：鈴木準一郎)

13. キャリア支援専門委員会

a. 報告事項

①生態学会広島大会での企画について

<ファミリー休憩室>

乳幼児や小学生連れの大会参加者向けの「ファミリー休憩室」の設置を大会実行委員会に提案し、設置に協力。子連れでの食事や休憩、授乳などに対応した休憩室として今大会で2回目の実施。

設置期間：2014年3月14日（金）～18日（火）

開設時間：3月14日（金）13:20～20:10

3月15日、16日（土）9:20～20:10

3月17日（月）9:20～18:10

3月18日（火）9:20～14:00

場 所：フェニックスホール裏の楽屋③

託児室も例年通り設置予定。

<キャリア支援フォーラム>

日時：3月15日 広島国際会議場地下二階E会場

18時～20時

18時～18時10分 あいさつ（半場）

18時10分～30分 「若手のキャリア支援に関する意識調査」坂田

18時30分～19時 「労働契約法の改正と実務への影響」関西外国語大 篠原先生 講師紹介：半場

19時～19時30分 「博士人材を取り巻く雇用環境の変化」ポスドクスタイル佐々木様 講師紹介：別宮

19時30分～20時 総合討論（司会：別宮）

総合司会：別宮

<企業ブース>

2014年3月16日10時～17時に設置。担当者来場はなし。

ポスドクスタイル株式会社	資料展示
株式会社 生態計画研究所	ポスター、資料展示
(株)建設環境研究所	資料展示
キャリア支援委員会	生態学研究室出身学生の進路先一覧を紹介

②2014年度の活動計画（案）

予算：キャリア支援は2013年度 ¥145,670 の予算

を請求した。2014年度予算については未定。

- ③ 2013年度のキャリア支援専門委員会の学会以外での活動について（報告）
 - ・キャリア支援HPを引き続き運営。「生態学若手の会」と引き続きリンク。http://www.esj.ne.jp/careersupport/crrsprt_index.html
 - ・2013年10月7日の学協会シンポジウム（東洋大学）にて生態学会の活動をポスター発表。
 - ・学協会連絡会運営委員会への参加（委任状提出含む）
 - ・大規模アンケートへの協力
 - ・「女子中高生夏の学校」への参加（「水辺の生態系を観察しよう」：担当は東京農工大学大橋さん）。
- （文責：半場祐子）

14. 電子情報委員会

a. 昨年度の活動の報告

- ① 学会事務局の会員管理システムの更新への協力
現在テスト中。
- ② 次期会長・全国委員選挙の電子投票への協力
つつがなく行われた。次回以降も現在のシステムを利用の方向
- ③ 学会サーバの日常的メンテナンス作業
メールアカウントの作成、メーリングリストの開設、地区会・委員会用領域の確保、SSL保証書の更新、システムの更新、大会サイトの用意（WordPressの設定）等

b. 今年度の活動予定

- ① 学会サーバの日常的メンテナンス作業
- ② 会員管理システムの更新への協力
英語化。今年度大会までに本稼働を目指す。
- ③ ERデータペーパーのデータ置き場の委託関係の整理
- ④ 電子情報関連業務（会員管理、全国大会用オンラインシステム等）の運営体制の見直し作業（タスクフォース）への協力。
必要な機能、会員のボランティア負担の適正化、コストなどを考慮し、効率的で持続可能な体制の構築を目指す
現在、問題点の整理と情報収集中。

c. その他

- ① 会員・潜在的会員・一般に向けての情報提供について
インフラ整備、コンテンツ整備ともに今後の検討
（文責：竹中明夫）

16. 日本学術会議の活動報告

- 2013年10月5日、統合生物学委員会（生態科学分科会の上位の委員会）の報告

(1) 生物学の参照基準

多くの人の協力によって、完成し公開された。10月9日（水）に公表され、日本学術会議HPに掲載されている。

<http://www.scj.go.jp/ja/info/index.html>

このとりまとめには、日本生態学会の会員が多数参加しており、その意見が多く反映している。日本生態学会の会員には、各大学でのカリキュラム編成に生かしていただきたい。

(2) 学術の大型研究計画

今回は237件の応募があり、内17件は3年前に決めたマスタープランのうち予算化された計画だった。そのうちほとんどすべて、192件が大型研究計画として決定した。そのあと、順位の高い66件についてヒアリングがあり、最終的に25件程度を「重点大型研究計画」とし、その結果は2014年初頭に公表された。生態科学分科会関連では1件の計画が、ヒアリングまで呼ばれたが、重点大型研究計画には採択されなかった。

上記の25件には、3年前にリストになり予算化がすすんでいる17件は除く。新たな「重点大型研究計画」は、文部科学省の委員会でヒアリングをうけ、各研究機関から概算要求として申請し、そのうち3分の1程度には予算がつくと予想である。これが今後とも3年ごとに繰り返し替えされる予定。

(3) 日本版NIHについて

進められてはいるが、現在厚労省や文科省等別々の省庁の研究費として行われているものを、そのままの枠組みで、日本版NIHを実現する予定という説明があった。

- 2014年1月6日 生態科学分科会を開催し、今後の生態科学の中で進展すべき分野についての議論に集中した。

1) 日本学術会議活動報告

鷺谷いづみ（東京大学）
「統合生物学委員会報告および日本学術会議の今後」
半場祐子（京都工芸繊維大学）
「若手アカデミー委員会報告：キャリアパスについて」

2) 生態科学で今後伸ばして行くべき分野

（第1部：地球環境科学としての生態学）
中野伸一（京大生態学研究センター所長）
「生物多様性観測ネットワーク：大型研究計画」
甲山隆司（北海道大学）
「Future Earth：地球生態系変化に関する国際研究組織について」
中静透（東北大学）
「環境省、林野庁、JSTなどの生態学関連プロジェクトについて」

3) 生態科学で今後伸ばして行くべき分野

（第2部：生理学・分子生物学との接点）
吉田丈人（東京大学）
「エコゲノミクスと逆生態学：遺伝子から生態系をどうつなぐか？」
寺島一郎（東京大学）
「生理学／分子細胞生物学と生態学の接点をさぐる」
（文責：巖佐庸）

B. 承認事項

1. 第63回大会（2016年）開催地

第63回大会は東北地区が担当し、2016年3月に仙台にて行うことが承認された。

2. 第64回大会（2017年）担当地区会

第64回大会は関東地区会が担当することが承認された。

C. 審議事項

1. 2014 年度予算案について

2014 年度予算案が決議された。

<一般会計>

収入の部			支出の部		
	13 決算	14 予算		13 決算	14 予算
年会費			会誌発行費		
正会員（一般）	30,059,100	29,200,000	ER	10,179,121	12,000,000
正会員（学生）	7,046,100	7,000,000	生態誌	4,158,050	4,500,000
賛助会員	2,293,500	2,100,000	保全誌	1,618,000	2,200,000
地区会費		1,000,000	ニュースレター	968,941	1,000,000
小 計	39,398,700	39,300,000	和文誌編集費	47,152	1,000,000
ER 売上還元金	1,301,955	1,391,745	小 計	16,971,264	20,700,000
編集事務費用	1,706,010	1,750,905	会議費	181,709	200,000
学会誌売上げ	574,700	1,300,000	旅費・交通費	2,229,530	2,500,000
科研費			人件費	14,330,778	10,000,000
国際情報発信強化 A	16,600,000	17,600,000	地区区会活動費	1,463,900	2,500,000
公開講演会	1,300,000	1,300,000	大会支出	21,032,099	21,000,000
小 計	17,900,000	18,900,000	公開講演会	1,305,516	1,300,000
出版印税	1,142,966	700,000	INTECOL 会費	438,566	430,000
広告代	300,000	180,000	事務費		
著作権使用料	524,443	400,000	通信費	742,150	800,000
ER 超過ページ代	300,216	700,000	消耗品費	167,765	250,000
大会収入	19,455,790	19,000,000	雑費	146,515	1,400,000
講習会費	0	100,000	銀行手数料	110,560	120,000
その他	14,359	15,000	レンタルサーバ料	403,250	0
前年度繰越金	43,902,460	53,748,925	事務所維持費	1,680,000	1,680,000
			税務費用	283,500	500,000
			小 計	3,533,740	4,750,000
			各種委員会費	668,675	1,500,000
			選挙費	731,540	0
			EAFES 費用	0	200,000
			講習会費	5,072	600,000
			60 周年費用	81,055	—
			法人化準備費	445,850	—
			国際化推進費		
			編集委託費	7,801,200	6,000,000
			英文校閲・翻訳	672,000	2,000,000
			編集委員会開催等	619,380	600,000
			電子化関連費	260,800	2,000,000
			シンポ・セミナー開催関連	0	1,500,000
			人件費	0	3,000,000
			論文 OA・FA に係る経費	0	2,500,000
			小 計	9,353,380	17,600,000
			法人税		400,000
			次年度繰越金	53,748,925	53,806,575
合 計	126,521,599	137,486,575	合 計	126,521,599	137,486,575
単年度収入	82,619,139	83,737,650	単年度支出	72,772,674	83,680,000

<特別会計>

特別会計Ⅰ（宮地基金）

収 入 の 部			支 出 の 部		
	13 決算	14 予算		13 決算	14 予算
前年度繰越金	2,501,654	2,200,144	宮地賞賞金	300,000	400,000
預金利息	380	0	雑費	1,890	2,000
			次年度繰越金	2,200,144	1,798,144
合 計	2,502,034	2,200,144	合 計	2,502,034	2,200,144

大島基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	13 決算	14 予算		13 決算	14 予算
前年度繰越金	9,134,212	8,934,287	大島賞賞金	200,000	200,000
預金利息	1,440	0	雑費	1,365	1,500
			次年度繰越金	8,934,287	8,732,787
合 計	9,135,652	8,934,287	合 計	9,135,652	8,934,287

琵琶湖賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	13 決算	14 予算		13 決算	14 予算
前年度繰越金	732,266	240,951	旅費	235,100	0
預金利息	111	0	その他諸費用	256,326	500
			次年度繰越金	240,951	240,451
合 計	732,377	240,951	合 計	732,377	240,951

鈴木賞基金

収 入 の 部			支 出 の 部		
	13 決算	14 予算		13 決算	14 予算
寄付	0	0	鈴木賞賞金	150,000	150,000
前年度繰越金	5,000,110	4,849,321	雑費	1,575	1,500
預金利息	786	0	次年度繰越金	4,849,321	4,697,821
合 計	5,000,896	4,849,321	合 計	5,000,896	4,849,321

2. 監事追加選任について

以下の監事追加選任が承認された。

小泉 博（早稲田大学）

Ⅲ. 第61回日本生態学会大会の記録

第61回日本生態学会大会は広島国際会議場を会場として2014年3月14日～3月18日に開催されました。

大会期間中に公開講演会1、シンポジウム17、フォーラム7、企画集会25、自由集会30、一般講演(口頭発表)214、一般講演(ポスター発表)1000、高校生ポスター55、が行われました。参加者は2,464名でした。5日間の日程とポスター賞(日本生態学会公認表彰)・高校生ポスター賞・英語口頭発表賞受賞者は以下の通りです。

日 程

- 3月14日 全国委員会、各種委員会(大会企画委員会、日本生態学会誌刊行協議会、Ecological Research刊行協議会、保全生態学刊行協議会、将来計画専門委員会、生態学教育専門委員会、外来種検討作業部会、自然保護専門委員会、生態系管理専門委員会、大規模長期生態学専門委員会、野外安全管理委員会、キャリア支援専門委員会、電子情報委員会)、自由集会
- 3月15日 シンポジウム、一般講演(ポスター発表)、高校生ポスター、フォーラム、企画集会、
- 3月16日 公開講演会、一般講演(口頭発表)、一般講演(ポスター発表)、フォーラム、企画集会、企業ブース
- 3月17日 総会、各賞授賞式、受賞講演、一般講演(ポスター発表)、ランチョンフォーラム、自由集会、懇親会
- 3月18日 一般講演(口頭発表)、フォーラム、企画集会

ポスター賞受賞者

<外来種>

【優秀賞】

「メソプレデター・リリースが生じる状況下における外来種の管理戦略」* 西嶋翔太(東大・農・生物多様性)、瀧本岳(東邦大・理・生物)、宮下直(東大・農・生物多様性)

「奄美大島におけるファイリマンゲース(*Herpestes auropunctatus*)の残存地域特性の解析と残存リスクの地域別評価」* 小峰浩隆(農工大)、竹下和貴(農工大)、阿部慎太郎(環境省)、石川拓哉(環境省)、橋本琢磨(自然研)、北浦賢次(自然研)、諸澤崇裕(自然研)、関香菜子(自然研)、梶光一(農工大)

<行動>

【最優秀賞】

「なぜコキクガシラコウモリは冬期出洞するのか?」* 佐藤雄大、関島恒夫(新潟大院・自然科学)

【優秀賞】

「Parasite removal alters patch use of Formosan mice *Apodemus semotus*」* Ching-Ho Hou, Yu-Teh K. Lin (NTU, IEEB), Pei-Jen Lee Shaner (NTNU, LS)

「他種の鳴き声によって行動を変えるトノサマガエル」* 福元修斗(九大・シス生・生態研)、吉村友里(九大・シス生・生態研)、粕谷英一(九大・理・生物)

<植物繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「センダングサ属における花粉干渉と資源競争が分布決定に与える影響について」* 吉崎雄宏、西田隆義(滋賀

県大・環境)、高倉耕一(大阪市環境研)

【優秀賞】

「クロノナル植物コンロンソウ集団の遺伝構造と生活史形質におけるジェネット間差の解析」* 辻本典顯、荒木希和子、八杉公基、本庄三恵(京大・生態研)、永野惇(京大・生態研、JST・さきがけ)、工藤洋(京大・生態研)

<進化>

【優秀賞】

「適応放散する系統の特徴を探る～雑種形成と性選択の役割～」* 香川幸太郎(東邦大・理)、瀧本岳(東邦大・理) 「キューバ産アノールトカゲの異なる温度環境への適応機構」* 赤司寛志(東北大・生命)、Antonio Cádiz Díaz(ハバナ大)、Lazaro M. Echenique-Diaz(宮教大)、牧野能士(東北大・生命)、齋藤茂、富永真琴(生理研・生命環境)、河田雅圭(東北大・生命)

<生態系管理>

【最優秀賞】

「河川において支流のダム操作は主流の流況改変を増幅するか、軽減するか? - 相模川宮ヶ瀬ダムの評価事例 -」* 梁政寛(東工大・土木)、吉村千洋(東工大・土木)、Pengzhe Sui(東工大・土木)、Oliver Saavedra(東工大・土木)

【優秀賞】

「夏季の草刈が草原生希少草本スズサイコの繁殖成功と遺伝的多様性を低下させる」中浜直之(京都大院・農)、内田圭、丑丸敦史(神戸大院・人間発達環境)、井鷲裕司(京都大院・農)

「集落柵の設置及び緩衝帯整備がニホンザル農作物加害群の生息地利用に与える影響」* 中村勇輝(新潟大・農)、望月翔太(新潟大・院・自然研)、山本麻希(長岡技科大)、村上拓彦(新潟大・農)

<遷移・更新>

【最優秀賞】

「日本の山における森林限界の上昇速度とその要因について」* 岩井康平(東北大学・理)、中静透(東北大学・生命)

【優秀賞】

「Indirect plant-plant facilitation: 成木はササ抑制を介して樹木更新を促進する」* 辰巳晋一(東大・農)、尾張敏章(東大・農)

<動物と植物の相互関係・送粉・種子散布>

【優秀賞】

「クヌギの葉に丸く穴をあけて食べるムササビの採食様式」* 伊藤陸実、林文男(首都大・生命)、Nickie Seto, Brianna Rico(アリゾナ大)、田村典子(森林総研・多摩) 「The specialized bracts of *Taraxacum*: an evidence of the evolutionary arm race between plant and florivory」 呉隼宇(九大・理)、川口利奈(九大・理)、矢原徹一(九大・理) 「海流だけでなく、鳥による散布能力も異なるクサトベラの果実二型」* 栄村奈緒子(立教大理)、酒井美由紀、傳田哲郎(琉大理)、安藤温子、井鷲裕司(京大農)、上田恵介(立教大理)

「The effects of N addition on the interaction between leaf traits and herbivore insects」* Jin LEE, Masahiro

NAKAMURA, Tsutom HIURA (Hokkaido University)

<動物個体群>

【最優秀賞】

「Antagonistic indirect interactions between large and small conspecific prey via heterospecific predator: experimental study using amphibian predator-prey system」*Aya Yamaguchi (Graduate school of Environmental Science, Hokkaido University), Noboru Katayama, Osamu Kishida (Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University)

【優秀賞】

「Predator dimorphism and prey learning increase the period of predator-prey cycles」*Inaba, Y., Kagawa, K., Takimoto, G., Hasegawa, M. (Toho Univ.)

<植物生理生態>

【最優秀賞】

「シロイヌナズナジェノタイプ間の競争におよぼす高CO₂の影響」*今野晋太郎、小口理一、尾崎洋史 (東北大・生命)、松島野枝 (国立環境研)、河田雅圭、彦坂幸毅 (東北大・生命)

【優秀賞】

「秋田スギの梢端葉の水ストレスは貯水機能によって改善される?」*東若菜、南野拓也、堀田佳那、石井弘明、黒田慶子 (神戸大院・農)

「ハワイフトモモの葉形質多型における生理的基盤-複数の環境因子に対するラミナとトライコームの個別的応答-」*辻井悠希、小野田雄介 (京大・農・森林生態)、伊津野彩子、井鷲裕司 (京大・農・森林生物)、北山兼弘 (京大・農・森林生態)

「無機窒素吸収と同化に着目した葉と根の特性比較」*岩瀬祐也、鈴木恵理、上田実希、彦坂幸毅 (東北大学・院・生命科学)

<物質循環>

【最優秀賞】

「森林管理とエネルギー利用が炭素循環に与える影響の解明~現代における持続可能な里山管理とは?~」*松下華代、友常満利 (早稲田大・院・先進理工)、坂巻義章 (早稲田大・理工総研)、小泉博 (早稲田大・教育)

【優秀賞】

「根の分解率は何によって決まるか?—熱帯樹木の太根を用いた分解実験と材特性分析—」*堀めぐみ、中川弥智子 (名大院・生命農)

「北海道知床半島におけるヒグマによる河畔林へのサケ類由来栄養塩の輸送」*越野陽介 (北大院・水)、野別貴博 (公財・知床財団)、工藤秀明、桜井泰憲 (北大院・水)、帰山雅秀 (北大・国際本部)

<群落・菌類・微生物>

【優秀賞】

「熱帯山地林における維管束性着生植物の林分スケールでの空間分布」*中西晃 (京大院・農)、田中美澄枝 (京大・農)、Sungpalee, W., Sri-ngernyuan, K. (Maejo Univ.)、神崎護 (京大院・農)

<動物繁殖・生活史>

【最優秀賞】

「カミキリモドキ類のメスが有する“精包破壊装置”:その構造と起源」*橋本晃生、菅原弘貴、林文男 (首都大・生命)

【優秀賞】

「カスミサンショウウオの成長に長期的・短期的な生息環境の変化が与える効果」*久木田沙由理、合田美佳、中村圭司 (岡山理科大・総情)

<動物群集>

【最優秀賞】

「昆虫の利用による死体の化学的性質の変化が死体上の生物群集形成を促進する」*伊藤美信、西垣敦子、長谷川雅美 (東邦大・理)

【優秀賞】

「厚岸湖におけるアマモ葉上生物群集の季節的な相互関係強度の変異」*百田恭輔 (北大・環境)、北村武文 (北大・厚岸)、濱岡秀樹 (瀬戸内水研)、仲岡雅裕 (北大・厚岸)

<保全>

【最優秀賞】

「在来大型ゲンゴロウ類保全のためのウシガエル侵入リスクマップ」*西山裕、西原昇吾、須田真一、鷲谷いづみ (東大院・農)

【優秀賞】

「護岸による生息環境劣化はニホンウナギにどのような影響を与えるか?」*板倉光、甲斐野翼、三宅陽一 (東大院新領域・大海研)、北川貴士 (東大・大海研)、木村伸吾 (東大・院新領域・大海研)

「福島潟および周辺水田におけるオオヒシクイの食性」向井喜果 (新潟大学・自)

「イヌワシ保全のための列状間伐地における伐採幅の違いがノウサギ誘引効果に及ぼす影響」*小林峻大、伊藤咲音、林田光祐 (山形大・農)

<景観・都市・生物多様性>

【優秀賞】

「Urban shade in Sapporo: 建物の隙間に棲むシダ植物の分布」*梶原一光 (北大院・農)、山浦悠一 (北大院・農)、古川泰人 (北大院・農)、森本淳子 (北大院・農)

「都市における鳥類相の保全に資するエコロジカルネットワークのあり方」*松葉史紗子 (東大院・農)、加藤和弘 (東大院・農)

「鳥類にとっての都市の透過性: モビングコールとサーキット理論を用いたアプローチ」*島崎敦 (北大・農)、山浦悠一、先崎理之、藪原佑樹、赤坂卓美、中村太士 (北大・農院)

高校生ポスター

【最優秀賞】

「植物就眠運動自動記録システムの開発」*佐々木さくら、*芝吹真美、*武井凜、*中原可南子、*平井優里、*山本愛結、*田中福人 (ノートルダム清心学園清心女子高等学校生命科学コース)

「クマムシの種による乾眠耐性の違いの研究」*佐伯ゆい、*村上碧野、*白山由希子 (愛媛県立今治西高等学校生物部)、中川和倫 (研究指導者)

「サシバの渡りの謎に迫る I サシバの秋の渡りには季節

風で生じる滑昇風が利用される!？」* 藤田竜輝、* 福本優希、* 田中秀直（愛媛県立南宇和高等学校自然科学部）、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校自然科学部顧問）

【優秀賞】

「名柄遺跡（奈良県、5世紀後葉）のモモ核の分類」* 飯田真璃、* 太田風虹、* 串田茉莉、* 後藤美香（奈良県立青翔高等学校）、生田依子（奈良県立青翔高等学校教諭）
「トウモロコシのC₄回路は二股か!？」* 松島耕平、* 月山皓太、* 中前理沙、* 大西満希、* 堀亮真（広島県立広島国泰寺高等学校）

「港のアリー外來アリのモニタリング」西俣菜々美、* 西牟田佳那、福倉大輔、* 榎本茉莉亜、栗巢連、山口大河（池田学園池田高等学校）

「須賀利大池（三重県尾鷲市）湖畔に成立する塩湿地性稀少樹種ハマナツメ群落の衰退に影響する要因の検討」* 小川葉奈、* 脇祐也（三重県立尾鷲高等学校自然環境研究部）、山本和彦、木戸澄奈（三重県立尾鷲高等学校自然環境研究部顧問）

「形態と遺伝子解析に基づく広島県産セトウチマイマイの地域差 新種と予想される特異集団の発見」広島国泰寺、広島井口、広島商業、千代田、大門、安芸南、西条農業、祇園北、安田高等学校（未定）

「早春の野幌森林公園におけるアライグマによるエゾサンショウウオの捕食状況」谷中陽祐、渡邊真記、* 平田識穂（北海道札幌啓成高等学校科学部）、植木玲一（北海道札幌啓成高等学校）、堀繁久（北海道開拓記念館）

「カワニナを通して考える地域の生態系」* 池田伊吹、* 中山拓磨、* 毛利匠、* 森佳穂（岐阜県立岐山高等学校生物部）

【審査員特別賞】

「京都久美浜における10年間のアカネズミの個体群動態環境変化の影響」* 坂本賢弥、* 村上健太、* 今井優樹、* 久内康頌、松浦宜弘、恩地実（甲南高等学校）

「カイミジンコの走性・耐性に関する研究」* 五重目和成、* 坂口陸、* 西本優姫、* 播摩彩夏（広島県立広島国泰寺高等学校）

「アブラナ科植物の生存戦略」* アッペンディーノ舵、* 上西龍樹、* 中田玄樹、* 伊藤悠揮、* 鈴木悠太、小畑洋一（大阪府立住吉高等学校サイエンス部）

「ツバメのオスはスズメが多い環境下ではイクメンになる」* 野々雄斗、田島隆宣（愛知高等学校科学部）

「日高地方におけるタンポポの分布から 在来・外來・雑種の侵入と分布の要因を探る」* 中筋彩見、山本実永、塩崎俊介、土屋知也、松本悠、寺井美樹、* 友渕千尋、山下涼実、* 山根菜恵子、湯森梢、清水理（和歌山県立日高高等学校）

「変形菌モジホコリカビの餌選好性 食べ出す部位に好みがあるか?」* 佐藤史奈、堀田愛美、安元暁子（早稲田佐賀高等学校サイエンス部）

「絶滅危惧昆虫オオムラサキを活用して地域の活性化をはかる」* 大濱美穂、* 笠山良美、* 金山美咲、* 松山紗月、藤岡望、田伏美貴、三日月茜（大阪府立枚岡樟風高等学校）

「2004年から2013年の観察結果よりみる久美浜湾の水

塊特性 京都府最大のラグーンの開鎖性をもたらす環境特性」* 吉田卓真、* 前田慎治、* 小野颯真、* 布施正篤、松浦宜弘、山内守明（甲南高等学校）

「ピレノイドを持つツノゴケは地球の救助隊!? ルビスコのループ配列の解析から」* 今田辰海、* 廣田恋理、* 飯村彬仁、* 井藤知里、* 岩原直輝（広島県立広島国泰寺高等学校）

「シラホシコヤガ幼虫が示す隠れ糞剥ぎ取り後の修復行動」* 稲岡建斗、東島康峻、安元暁子（早稲田佐賀高等学校サイエンス部）

「猿沢池のアオコの発生から考える水質保全」* 狩田帆乃夏、* 赤木美穂（奈良女子大学附属中等教育学校）

「有機溶媒耐性細菌の研究」* 川上夏葵、* 平田あや、* 瀬川美加、* 渡部彩夏（愛媛県立今治西高等学校生物部）、中川和倫（研究指導者）

「アレロパシーを探そう!」* 木山昂海、* 原田脩平、* 山本理紗、* 漆原悠貴（広島県立広島国泰寺高等学校）

「実験室内で卵から育てられたオオイタサンショウウオで配偶行動を誘発する」* 伊藤頌子、* 田中美世（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）、秋山繁治（顧問）
「野外におけるニホンテンの行動と環境条件」* 中坪知輝（広島学院中学校）

「天満川に生息するホトトギスガイの生態学的研究」* 奥迫優、* 廣瀬拓人（広島県立広島観音高等学校生物・地学部）

「四苦葉苦 葉の中の空気を取獲!」* 富島優馬、* 松永諒、* 勝原彩、* 伊達玄馬（広島県立広島国泰寺高等学校）

「東京都八丈島底土におけるハードコーラル被度調査と被度推移」* 角田圭吾（成蹊高等学校生物部）、佐藤尚衛（成蹊中学高等学校生物科）

「守れ!ふるさとのカスミサンショウウオV ～保護活動と東海地方の地域個体群間の系統解析～」* 橋晃太郎、* 加藤真帆、* 馬淵朋哉、* 眞田樹也、* 杉山加奈、* 篠原悠希、* 安澤晃、* 二村凌、* 石田瑞生、* 磯貝涼介、* 後藤暁彦、* 高木悠、* 丹羽大樹、* 林俊輔、* 増田綾香、* 三輪直生、* 村瀬希（岐阜県立岐阜高等学校自然科学部生物班）、水戸直（長浜バイオ大学）、藤谷武史（名古屋市東山動物園）、向井貴彦（岐阜大学）、矢追雄一、高木雅紀（岐阜県立岐阜高等学校）

「アサギマダラの渡りに関する基礎的な研究」* 増田奏海、* 濱田晃歩、* 水尾紗瑛子、藤田竜輝、福本優希（愛媛県立南宇和高等学校自然科学部）、橋越清一（愛媛県立南宇和高等学校自然科学部顧問）

「ハッチョウトンボの生態調査 ～ハッチョウトンボはどこまで飛ぶか～」* 河野覚、* 仲谷竜哉、佐々木春奈、岡本さくら、斎藤彩香、河本和也（島根県立浜田高等学校自然科学部）

「カサヤマキノデの起源について」* 池田尚由、* 竹永颯希、* 中村美稀（山口県立宇部高等学校理数科）、鶴谷保（山口県立宇部高等学校教諭）

「森林の二酸化炭素吸収能力の推定」* 吉岡ゆきの、* 大橋慈子（ノートルダム清心学園清心女子高等学校）、秋山繁治（顧問）

【ナチュラル・ヒストリー賞】

「沖縄島二河川に生息するグッピーの体の色模様の比較」古藏一平、座間味駿、城間悠太、儀保丹礼（沖縄県立名護高等学校授業生物探求）、*津波幹樹（沖縄県立名護高等学校生物部）

「プラナリアの学習と色彩」*宮原大司、*世羅弥江子、*潤居咲希、*廣瀬明日香（広島県立広島国泰寺高等学校）「汽水と海水が生物に及ぼす影響 京都久美浜における10年間のプランクトンの数の変化から」*山下真明、*廣岡健太郎、松浦宜弘、田中正弘（甲南高等学校）

「二上山における国内外来種アオモジの分布について」*辻本達哉（奈良県立青翔高等学校）、野上修也（奈良県立青翔高等学校教諭）

「ダイコンとストレス」*大西満希、*飯村彬、*松島耕平（広島県立広島国泰寺高等学校）

「プラナリアの研究」*脇坂百代（愛媛県立今治西高等学校生物部）、中川和倫（研究指導者）

「ミミズの農力」*白石香、*橋遥奈、*大西朱莉、*浅木彩花、*法橋恵果、*曾我部是政（愛媛県立西条高等学校）

「愛媛県今治地域の水生生物」*八塚正剛、*川又俊介、*奈良拓也（愛媛県立今治西高等学校生物部）、小野榮子（研究指導者）

「東京湾・相模湾 蔓脚類の系統解析」住谷学、*杉原翔吉（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）、市川学園市川高等学校、東京工業大学附属科学技術高等学校、横浜国立大学附属鎌倉中学校、横浜市立都岡中学校、横浜市立新羽中学校

「日本産イワナ島根県産ゴギ (*Salvelinus leucomaenis imbricus*)、長野県産ヤマトイワナ (*S. l. japonicus*)、北海道産アメマス (*S. l. leucomaenis*) における地理的分布と mt-DNA 塩基配列」*嶋下潮音、*伊藤謙吾、*柳生真輝人、*富士野健人、*井原一哉、*川本晟司（成蹊高等学校生物部）、荒井靖志（成蹊中学高等学校）

「カワヨシノボリの総イオン調節能力」*井戸基博、*天岡皓佑、*藤原海童、*田辺純一郎、*神康平（京都府立嵯峨野高等学校サイエンスラボ）

「*Euglena gracilis* における光合成の研究」*奈良拓也（愛媛県立今治西高等学校生物部）、小野榮子（愛媛県立今治西高等学校生物部顧問）

「東京都武蔵野市の小規模混交林内に生息する夜行性昆虫の季節的変動について」*菅善太、*飯田俊和、*磯谷朗太、*林航平、*清水勇樹、*西條彰（成蹊高等学校生物部）、佐藤尚衛（成蹊中学高等学校生物科）

「山のランドワークによる水質への影響について」*沖中司、*折元裕太、久保田圭貴、佐藤啓一郎、橋本湧哉、福岡瑞樹、麦谷翼、森岡楓斗、*山際遥己、横田佳直（広島県立西条農業高等学校緑地土木科）

「ナベブタムシの研究」*野間郁代、*濱田莉奈、*眞鍋友理乃、*池内匡和（愛媛県立今治西高等学校生物部）、小野榮子（研究指導者）

「里山を利用した循環型社会の構築 森林樹木調査を通して」宇根篤広、大瀬戸勝平、大藤成孝、香川巧兵、*北村一馬、木原海勝、*久保幹太、酒井征弥、佐村修平、利田悠輔、*三浦祐太（広島県立西条農業高校緑地土木

科）

「琵琶湖淀川水系のヌマチチブは国内外来種か？」*井上和樹、*田中佑季、*鎌田知希、*杉本倅平、*黒川亮、*松本菊世、*平山咲彩（京都府嵯峨野高等学校サイエンスラボ）

「ウメノキゴケの生育に影響を与える要因について」*杉元美友、*上広昌幸、*河野浩也、*渋谷凌太、川本友希、幸徳冨佳、石倉聡士、小倉涼蘭、佐々木梨緒、山口真由、ラオビアスマ真歩（広島県立西条農業高等学校自然科学部）

「岡山市におけるキマダラカメムシの生態調査」*内西友貴、*榎本祐介、*櫃本有希雄、*藤原熙士（岡山理科大学附属高等学校）

「キノコ培地からのバイオエタノール生産のための基礎研究」安済さらさ、*森下あすみ（群馬県立高崎女子高等学校生物部）

「ウミガメの来る砂浜環境調査 2013」竹植希、平松元文、*蒔田香織、岡田千果、島倉拓海、東山瑞希、瀬川奈津紀（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

「ブルーベリーのプロトプラストからハイブリッド作成／表現型は中間型なのか」藤尾美沙希（横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校）

英語口頭発表賞受賞者

< Award 1: Animal behavior, population and evolution >

【Best Award】

「Mate contest in hermit crab: winner/loser effects are enhanced when contest with familiar opponents.」Chiaki Yasuda, Satoshi Wada

【Excellent Award】

「Abnormal morphologies on castrated mantids (Insecta: mantidea): the phenotypic alteration induced by parasitic horsehair worms (Nematomorpha: Gordiida)」Ming-Chung Chiu (National Taiwan Univ), Chin-Gi Huang, Wen-Jer Wu, Shih-Feng Shiao

< Award 2: Plant physiology, population and community >

【Best Award】

「Soil microbial composition alters the relative importance of plant traits in determining plant-soil feedback strength」Ke, P.-J., Miki, T., Ding, T.-S.

【Excellent Award】

「Testing the accuracy of matrix models for predicting forest dynamics: A case study of Barro Colorado Island, Panama」Sugiyama, A., Hubbell, S.P., Masaki, T.

「Range expansion and lineage admixture of the Japanese evergreen tree *Machilus thunbergii* in central Japan」Shuntaro Watanabe, Yuko Kaneko, Yuri Maesako, Naohiko Noma

「Relative importance of mycorrhizal- and pathogenic-fungi on seeding establishment in gap and understory continuum」Wulantuya, Fukasawa Y, Seiwa K

< Award 3: Animal community, ecological interaction, and network >

【Best Award】

「Shifts in community body size of geometrid moths over 42 years on a tropical mountain」 Wu CH, Chen IC, Holloway JD, Ho CK

【Excellent Award】

「Revisit the cod-invertebrate coupled relationship bottom-up or top-down?」 Chen-Yi Tu, Yongjun Tian, Chih-hao Hsieh

< Award 4: Animal social behavior and social insects >

【Best Award】

「Advantage and disadvantage of the decision making algorithm of egg piling behavior in termites」 Chiho Iwata, Kazuya Kobayashi, Kenji Matsuura

「Colony-specificity of shelter-tube construction in termites」 Nobuaki Mizumoto, Kenji Matsuura

【Excellent Award】

「Antennal cropping in a dry-wood termite, *Neotermes kosshunensis*」 Miyaguni, Y., Sugio, K., Tsuji, K.

< Award 5: Microbial and ecosystem ecology >

【Best Award】

「High-throughput sequencing and a microscope-based analysis of the soil prokaryotic community along vegetation gradients in a dry arctic tundra」 USHIO, Masayuki, MAKOTO, Kobayashi, KLAMINDER, Jonatan, TAKASU, Hiroyuki, NAKANO, Shin-ichi

【Excellent Award】

「Detecting causality in harmful cyanobacteria bloom dynamics」 Tsai, C.H., Chang, C.W., Hsieh, C.H.

「Soil nitrogen dynamics in tropical seasonal forests of Cameroon -a comparison of two forests under different soil conditions-」 柴田誠, 杉原創, Mvondo Ze Antoine, 荒木茂, 舟川晋也

Ⅳ. 書評依頼図書 (2013年9月～2014年4月)

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局 (office@mail.esj.ne.jp) までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 大川ち津著「大川式植物検索入門 植物の特徴を見分ける本」(2013) 128pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1455-6
2. 日本魚類学会自然保護委員会編「見えない脅威”国内外来魚” どう守る地域の生物多様性」(2013) 256pp. 東海大学出版会 ISBN:978-4-486-01980
3. 井上英治・中川尚史・南正人著「野生動物の行動観察法 実践日本生態学会の哺乳類学」(2013) 186pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062223-3
4. 井鷲裕司・陶山佳久著「生態学者が書いた DNA の本メンデルの法則から遺伝情報の読み方まで」(2013) 200pp. 株式会社文一総合出版 ISBN:978-4-8299-

6522-1

5. 池谷和信編「ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第2巻 生き物文化の地理学」(2013) 374pp. 海青社 ISBN:978-4-86099-272-9
6. 山口裕文編著「栽培植物の自然史Ⅱ 東アジア原産有用植物と照葉樹林帯の民族文化」(2013) 384pp. 北海道大学出版会 ISBN:978-4-8329-8206-2
7. 三上修著「スズメつかず・はなれず・二千年」(2013) 122pp. 岩波書店 ISBN:978-4-00-029613-7
8. 綿貫豊著「ペンギンはなぜ飛べないのか? 海を選んだ鳥たちの姿」(2013) 128pp. 恒星社厚生閣 ISBN:978-4-7699-1464-8
9. 大西文秀著「流域圏からみた日本の環境容量 - 日本のバイオリージョン - 全国109流域3D - GIS MAP -」(2013) 222pp. 大阪公立大学共同出版会 ISBN:978-4-907209-08-7
10. 八杉貞雄監訳 佐藤賢一・澤進一郎・鈴木準一郎・浜千尋・藤田敏彦共訳「スター生物学」(2013) 346pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0836-3
11. 樋口広芳編「日本のタカ学 生態と保全」(2013) 358pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060223-5
12. 上田恵介・岡ノ谷一夫・菊水健史・坂上貴之・辻和希・友永雅己・中島定彦・長谷川寿一・松島俊也編集「行動生物学辞典」(2013) 650pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0837-0
13. 原口昭著「日本の湿原」(2013) 208pp. 生物研究社 ISBN:978-4-915342-67-7
14. 日本生態学会編 原登志彦担当編集「現代の生態学 2 地球環境変動の生態学」(2014) 284pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05741-8
15. 総合地球環境学研究所編「地球環境マニュアル1 共同研究のすすめ」(2014) 106pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18045-9
16. 総合地球環境学研究所編「地球環境学マニュアル2 はかる・みせる・読みとく」(2014) 134pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-18046-6
17. 日本生態学会編 佐竹暁子・巖佐庸担当編集「現代の生態学 4 生態学と社会科学の接点」(2014) 204pp. 共立出版(株) ISBN:978-4-320-05742-5
18. 武内和彦・渡辺綱男編「日本の自然環境政策 自然共生社会をつくる」(2014) 250pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-060310
19. 富田涼都著「自然再生の環境倫理 - 復元から再生へ」(2014) 248pp. (株) 昭和堂 ISBN:978-4-8122-1254-4
20. 宮下直著「生物多様性のしくみを解く 第六の大量絶滅期の淵から」(2014) 240pp. (株) 工作舎 ISBN:978-4-87502-456-9
21. 田付貞洋編「アルゼンチンアリ 史上最強の侵略的外来種」(2014) 342pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-06224-2
22. 藤崎憲司・大串隆之・宮竹貴久・松浦健二・松村正哉著「昆虫生態学」(2014) 218pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-42039-5

23. 根本正之・富永達編著「身近な雑草の生物学」(2014)
152pp. 朝倉書店 ISBN:978-4-254-42041-8

V. 寄贈図書

1. 「第63回東レ科学振興会科学講演会記録」(2014)
42pp. 公益財団法人東レ科学振興会
2. 「みどりいし No.25」(2014) 37pp. 一般財団法人熱帯
海洋生態研究振興財団
3. 「こうえいフォーラム No.22」(2014) 100pp. 日本工
営株式会社技術委員会
4. 「第29回国際生物学賞記録」(2014) 36pp. 独立行政
法人日本学術振興会国政生物学賞委員会
5. 「果樹研究所研究報告第17号」(2014) 42pp. 農研機
構果樹研究所
6. 「環境情報科学 42-5」(2014) 126pp. 一般社団法人環
境情報科学センター
7. 「うみうし通信 No.82」(2014) 12pp. 公益財団法人水
産無脊椎動物研究所
8. 「国土技術政策総合研究資料 緑化生態研究室報告書
第28集」(2013) 106pp. 国土交通省国土技術政策総
合研究所

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②
助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・
問い合わせ先をお知らせします。

(1) 遠山椿吉記念 食と環境の科学賞

- ①日本を拠点に活動する個人の研究者または研究グルー
プ。今年度は、食品の安全、感染症、生活環境衛生を
重点課題としました。
- ②賞状、記念品。賞金 100 万円
- ③応募期間:平成 26 年 4 月 1 日より 6 月 30 日(消印有効)
- ④〒 102-8288 千代田区九段南 4-8-32
一般財団法人東京顕微鏡院公益事業室「遠山椿吉賞選
考委員会」事務局
TEL.03-5210-6651 Fax.03-5210-6671

(2) 公益財団法人住友財団 2014 年度環境研究助成

- ①一般研究:環境に関する研究(分野は問いません。
課題研究:2014 年度募集課題「持続可能な社会への
着実な転換を可能にする方策に関する研究」
- ②総額 1 億 1,000 万円
一般研究 9,000 万円(1 件当たり最大 500 万円)
課題研究 2,000 万円(1 件当たり最大 1,000 万円)
- ③募集期間:2014 年 4 月 15 日(火)~6 月 30 日(月)
E-mail の締切は 6 月 23 日(月)
- ④〒 105-0012 東京都港区芝大門 1-12-16 住友芝大門
ビル 2 号館
公益財団法人 住友財団
TEL: 03-5473-0161 FAX: 03-5473-8471

E-mail: sumitomo-found@msj.biglobe.ne.jp

(3) 平成 26 年度(第 55 回)東レ科学技術研究助成

- ①当学会に関する分野で、下記のいずれかに該当する方
 - 1) 学術上の業績が顕著な方
 - 2) 学術上重要な発見をした方
 - 3) 効果が大きい重要な発明をした方
 - 4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大き
く貢献した方
- ②賞状、金メダルおよび賞金 500 万円(2 件以内)
- ③平成 26 年 10 月 10 日(金)必着
- ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

(4) 平成 26 年度(第 55 回)東レ科学技術賞

- ①当学会に関する分野で国内の研究機関において自らの
アイデアで萌芽の研究に従事しており、かつ今後の
研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところ
が大きいと考えられる若手研究者(原則として推薦時
45 才以下)。本助成が重要な研究費と位置づけられ、
これにより申請研究が格段に進展すると期待されるこ
とが要件。
- ②総額 1 億 3 千万円。1 件 3 千万円程度まで 10 件程度
とします。
- ③平成 26 年 10 月 10 日(金)必着
- ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書評

寺島一郎著(2013)「植物の生態 一生理機能を中心
に一」裳華房 268pp. ISBN978-4-7853-5855-6 定価
2940 円(本体 2800 円+税 5%)

本書は「新・生命科学シリーズ」として、生命科学に
関するテーマを、幅広い読者を対象に平易に解説するこ
とを目的として刊行されている全 16 冊のうち 1 冊であ
る(2014 年 2 月現在 9 冊が出版済み)。本書は、タイト
ルのとおり、植物の生態について生理機能を中心にまと
めたものであるが、大きな特徴としては、根本的な物理
学的法則や生理学的なメカニズムに忠実に基づいて、植
物の主要な機能(光合成、物質輸送、成長)から、群落
や陸域生態系まで幅広く説明していくところだろう。一
般に生態学の教科書は複数の著者によって書かれること
が多く、幅広いトピックを知ることができる一方、全体
としての一貫性が乏しいことが多い。その点、この本に
は軸があり、通して理解しやすい。若輩者の私が評する
のはおこがましい話であるが、著者の寺島氏は、植物生
理学という分野から日本や世界の生態学に大きく貢献さ
れてきた方である。寺島氏は戦後を代表する植物生態学
研究室である東大の門司・佐伯研究室をルーツにもち、
植物生理学を中心とした研究を展開する中で、植物群落
や生態系レベルの研究者とも幅広く交流されてきた。こ
の本は、そのような背景をもつ寺島氏だからこそ執筆で
きたものである。

内容を具体的に紹介していく。1-3章は生態学の概論である。適応や進化の概念を知らない人にとっては重要であるが、生態学を研究している人にとっては一般的な内容である。4章では植物の特徴が細胞から個体レベルで概説されている。この章では、この本の重要概念である化学ポテンシャルの説明がある。化学ポテンシャルは、水輸送、物質の取り込み・排出、物質の合成など様々な生命現象の駆動要因であり、著者も述べている通り、ここをじっくり理解することが、その後の内容を深く理解することにつながる。5章は植物の水利用を取り扱い、先の章で学んだ化学ポテンシャルの概念を用いて、植物が根から茎を通して葉までどのように水を運ぶかについて、丁寧に説明している。物理的法則の中で、植物のシステムが如何にうまく機能しているかが実感できる。6章では光を取り扱う。太陽の光の質と量という物理的な内容から始まり、植物の光獲得について、物質・オルガネラレベルから、器官・個体・群落レベルまで体系的に説明されている。7章は光合成の生理学について、8章では光合成の生理生態学についてまとめられている。8章は寺島氏の専門分野の本丸であり、限られた分量の中に、厳選された重要な内容がわかりやすくまとめられている。9章は呼吸の生理学から、成長や維持に関わる呼吸など生態学的視点まで、幅広くまとめられている。10章は無機栄養の獲得についてであり、ここでも4章で学んだ化学ポテンシャルの概念が生きる。ただ水輸送の話ほど踏み込んだ説明はない。11章は植物の成長モデルについて扱い、植物成長や繁殖について理論的な理解を深めるものである。12章は陸域生態系の話となり、気候や大気循環、植生、環境問題など、生態学では比較的一般的な内容を取り扱う。

植物の生理生態学系の教科書では、Larcherの植物生理生態学(翻訳版あり)やLambersらのPlant Physiological Ecology(洋書)などがあるが、いずれも分厚く、内容も分野ごとに独立している印象がある。一方で、理論系の教科書ではNobelのPlant Physiology(洋書)があるが、これは数式が多すぎて、ハードルが高い。植物を理解する上で必要な原理・理論を分かりやすく説明し、かつ植物の生理・成長・生態という幅広い分野をバランスよくカバーした手頃な分量の教科書(本書はA5の250ページ余り)というのは、国内外を見回してもユニークなものだと思う。内容は濃いため速読できるタイプの本ではないが、この分量ならば通して読むことはそれほど難しくはない。

コラムや脚注では、テーマに関係するトリビア的な話題が提供されていて良い息抜きになる。またこの書には付録があり、やや程度の高い部分などを電子補遺として裳華房Webサイトから無料ダウンロードできるようになっている。シリーズ本の中でも電子補遺をつけているのはこの本だけであり、著者の気概を感じる。この補遺を見ると、ペンマン・モンティースの式など、(私にとっては)聞いたことはあるけどよくわかっていなかったような内容も簡潔に説明されており、勉強になる。

この本では海外研究者の研究例に混ざって、日本人の研究例が多く紹介されている。それらは身内だから引用

されているのではなく、世界に誇れる研究であるからである。日本の植物生態学は世界的に見ても大きな貢献をしてきた。この本は、日本の植物生理生態学が世界にどう貢献してきたかを垣間みる上でも有用だろう。

副題で「生理機能を中心に」と書いてあるように、植物生態学の全ての分野を網羅した内容ではない。個体群動態や個体間相互作用、多種共存、進化・系統などに関する話題は、この書ではほとんど取り扱っていない。限られた分量でまとめなければならないことを考えると、仕方がないことである。シリーズ16冊の中では、伊藤元己著の「植物の系統と進化」もあるので、系統や進化に興味がある人はそちらも参考にすればよいだろう。しかし、個体群動態や多種共存を扱った書はないので、そのようなテーマもシリーズに含めてほしいと個人的には思う。

評者がこの書を読みおえたとき、この書は学部生レベルには少々難しいかもしれないと思った。しかし、この書を読んだ農学部の3回生と話したところ、基礎から丁寧に説明されており、学部生でも十分に理解できる内容だということ。むしろ、学部1-2回生で教養の基礎物理などを軽く習った後に読むと、物理学的法則に基づいて、植物のシステムが如何にうまく機能しているかが分かって、植物に対する興味が増すのではないかという話だった。なるほどと思った。学部生は比較的幅広く勉強しており、専門外という抵抗が少ないので、この書を自然に受け入れるのかもしれない。また工学や物理の分野でも、生物学を取り入れた研究は多くなっており、この書は、生態学を勉強するものに限らず、広く一般に有用なものだと考えられる。私が最初に感じた「少々難しいかもしれない」という印象は、むしろ生態学の特定分野に特化してしまっている学生や研究者が多いことを想定していたからだ。世界と肩を並べようと、細分化された分野に専念してしまうと、植物の本質を見過ごしがちになっているのかもしれない。そのような学生や研究者にとって、原点に立ち返って、少々苦勞しつつも、植物生態学をきっちりおさらいする価値はあるだろう。それによって植物をより実感のこもった対象として捉えることができ、それぞれの研究分野についても新しい視点が開けるかもしれない。本書は、植物生態学を研究する人、そして広く一般に、植物のシステムに興味がある人に、おすすめの一冊である。

(京都大学大学院農学研究科 小野田雄介)

T. Ohgushi, O. J. Schmitz, & R. D. Holt. (2012) 「*Trait-mediated indirect interactions: ecological and evolutionary perspectives.*」 Cambridge University Press. 571 pp. ISBN: 978-0521173131 定価 USD\$65.00

我々ヒトは、生き物として生態的相互作用の世界の中に存在している。食う食われる関係、送粉関係、細胞内共生関係などの実感できる相互作用が明らかに多いが、そんなに簡単に実感できない相互作用もあるであろう。つまり、いわゆる間接相互作用が我々の周りの世界に多い。どこまで多くてユビキタスなのかというのは、京都大学の大串隆之教授、米国エール大学のオズワールド・

シュミッツ教授、そして米国フロリダ大学のロバート・ホール教授によって編集されたこの興味深い本のテーマである。

まず、間接相互作用というのはどういうことか？ 2種類の相互作用が3種目によって変化させられる、というのが間接相互作用と呼ばれている。間接相互作用には、密度介在型の間接相互作用と形質介在型の相互作用という二つのタイプがある。密度介在型の間接相互作用 (density-mediated indirect interactions) というのは、3種目の存在によって、1種目の密度が変化して、2種目へ影響を及ぼすということである。被食者 (種 A) と捕食者 (種 B) の関係の中で、捕食者の種 (B) が他の被食者 (つまり、種 C) を捕食して個体数が増加したら、種 B の増加によって、捕食される種 A の密度が減少する、というような例が有名である。しかし、この本のテーマの形質介在型の間接相互作用 (trait-mediated indirect interactions; TMIs) は密度によって介在されなくて、種 C の形質の変化によって生じるものなのである。例えば、植食者 (種 A) と植物 (種 B) の間の関係では、植食者が捕食者 (種 C) の匂いを感じたら植食者の採餌時間が減って、植物への食害が減るとするのは非常に分かりやすい例であるかもしれません。また、植食性昆虫 (種 A) と奇主植物 (種 B) の間の関係では、ゴールを形成する植食性昆虫 (種 C) の存在によって、植物の再成長量が増えて、それを餌にする種 A が増える、というのもそのような例である。この本では、その他にもいろいろな例が挙げられる。

この本はある意味で、同じく大串教授がティモシー・クレグ教授とピーター・プライス教授と共同で編集した「*Ecological Communities: Plant Mediation in Indirect Interaction Webs*」(ケンブリッジ大学出版社、2007年)の続編として考えて良いかもしれないが、内容が2007年の本より広い。実際には、2013年の本は2008年の国際昆虫学会ダーバン大会で開かれたシンポジウムに基づいたものであるが、章で反映されているトピックと著者を見れば、昆虫学の学会が起源だとは思われないであろう。形質介在型の相互作用の分野でモデルシステムになっている昆虫・植物の関係だけでなく、陸上や海洋、脊椎動物や微生物、外来種、被食者・捕食者、奇主昆虫・寄生蜂、競争や理論の例からまとまっている。とても有名な研究事例が間接相互作用の立場から再解釈される章(第13章のCraig Benkmanのグループによるイスカとマツの共進化の研究や第16章と第19章のThomas Whithamらのポプラの群集遺伝学の研究)もあるが、トピックがより新しくレビューされた章もある。レビューのような章が多いが、あまり今まで研究の注目されていない分野の場合、これからの研究のための仮説が提供されている章もある。それぞれの章を読みながら、どのような生態学の研究でも形質介在型の間接相互作用の可能性を無視すると危ない、という結論が相次いで思いつく。

この本は4部に分かれていて、全部で27章からなっている。

第一部 I: Community (群集) 第2章~第10章
第二部 II: Coevolution (共進化) 第11章~第15章

第三部 III: Ecosystem (生態系) 第16章~第21章
第四部 IV: Applied Ecology (応用生態学)

第22章~第26章

第一部(群集)の中で、それぞれの群集の中の間接相互作用の役割や効果の例が書かれている。第2章ではThomas SchoenerとDavid Spiller(カリフォルニア大学デービス校)が「生態群集の中の間接効果の種類: 総合説明」というタイトルで形質介在型の間接相互作用の多様性を分類している。それ以降の章では、奇主昆虫・寄生蜂、被食者・捕食者、植物・植食者、海洋、理論、個体群動態の例が挙げられている。この中で、Frank van Veen(エクセター大学)とCharles Godfray(オクスフォード大学)の第3章が特に面白いとおもっていて、非常に簡単な寄生蜂と奇主昆虫の実験から生じる間接相互作用が面白くて、寄生蜂の圧倒的な多様性を維持するメカニズムの一つは間接相互作用から生じる複雑な局所的共存・非共存のパターンであろう、と思いついた。生態学のほとんどの分野でも理論で研究できる仮説が実証で研究できる仮説より進んでいるというのが共通の問題であって、第8章ではScott Peacor(ミシガン州立大学)とClayton Cressler(ミシガン大学)が理論からのアイデアを実際の実験系や野外系でどう使えばいいかというのを詳しく論じている。

私自身のバイアスかもしれないが、第二部(共進化)が特に面白く思った。間接相互作用の共進化の中の役割は新しいアイデアではないが、この部は知る限りでそのテーマの今までで一番深く書いてある例である。(比較文章としては、ジョン・トンブソンの「*Relentless Evolution*」(シカゴ大学出版社、2013年)を読んだら良いであろう。)実際に詳しく実証されている共進化の例は少ないが、共進化の重要性は大きいとしばしば考えられている。その中では間接相互作用の例はより少ないが、非常に面白い例があって、間接的な共進化の可能性を提示する。第11章では、Benjamin Ridenhour(ノートルダム大学)とScott Nuismer(アイダホ大学)が、どういう形質介在型の間接相互作用が共進化に重要なのか、どういうふうに関進化の動態を変化させるか、形質介在型の間接相互作用と共進化の地理的モザイク理論の間に関係があるか、というのを論じている。第13章では、Timothy CraigとJoanne Itamiら(ミネソタ大学ダールズ校)が、北米のアワダチソウ・ゴールを形成するハエ・寄生蜂・捕食者の鳥の間の間接相互作用の研究をまとめている。同じように、第15章ではCraig Benkmanら(ワイオミング大学)が今までの20年間のイスカ・リス・マツの間の間接相互作用の研究をまとめている。この両方の例の中から、間接的な共進化の群集の進化への影響、そして個体群間の分化への影響の可能性が簡単に想像できるが、まだ未知の世界であろう。

未知の世界が第三部(生態系)からも広がる。種間間接遺伝的効果(interspecific indirect genetic effects)、つまり「形質」の基である機能的遺伝子をどうやって形質介在型の間接相互作用の研究につなげばいいかとGerald Allenら(北アリゾナ大学)が第16章で紹介する。この章では著者のポプラの群集遺伝学の研究の中からいくつ

か例を取り上げる。第18章でMark Hunterら（ミシガン大学）が、第20章でJennifer Rudgers（ニューメキシコ大学）とKeith Clay（インディアナ大学）が、微生物がかかわっている間接相互作用の実証的な研究をまとめて論じる。Hunterらの場合は、植物・植食者が土壤微生物への影響に関する研究をまとめるが、RudgersとClayは、内生相利共生菌（microbial mutualists）のそれぞれのタイプの実証的な例から、これからの研究のための仮説をいくつか挙げる。

第四部（応用生態学）では、以上の過程の、農業やエコロジカル・マネージメントへの応用の例が詳しく紹介されている。第22章から第24章までは生物的防除の中の形質介在型の間接相互作用の例があって、この分野が害虫の管理にいろいろ実用があるというのが明らかにされる。第25章で、Erik AschehougとRagan Calloway（モンタナ大学）による植物間の形質介在型の間接相互作用での、形質の可塑性の役割の理論の話で、特に面白いと思った。最後に、第26章で、最近注目されている気象変化のフェノロジーへの影響による間接相互作用の変化についてJeffrey KerbyとEric Post（ペンシルバニア州立大学）とChristopher Wilmers（カリフォルニア大学サンタクルーズ校）が理論の研究と漁業のデータをまとめて論じる。しかし、これは気象変化の形質介在型の間接相互作用への影響のなかで、氷山の一角に過ぎないであろう（以下で参照）。

この本の価値は二つあると思う。ひとつには、これからの研究のための仮説やアイデアの参考としては、学生やポストドク、新しい研究テーマを考えたいどの年齢の研究者にとっても非常に役に立つと思う。新しい仮説がまとまっている章も多いし、データが少ないが調べれば面白いテーマの章も多い。ふたつには、分野の紹介として非常に役に立つ章がたくさんある。全章を読まなくても、自分の研究に関係のある章だけを読んでも有利であると思う。

この本はあまりに幅広い内容を含むので、「抜けている」テーマがあるというのは言いにくい。しかし、言うとしたら、それは「人間介在型の間接相互作用」の可能性であると思う。無論、第12章（ミシガン州立大学のJennifer Lau著）は（人間によって持ち込まれた）外来種と在来種の間接相互作用のテーマであって、第26章（Kerby、WilmersとPost著）は（人間による）気象変化の形質介在型の間接相互作用への影響のテーマであるが、ヒトというのは非常に形質の多様な種で、人間の周りの種への形質介在型の間接相互作用の強さや多様性が増えてきているのであろう。それがこれからの本のとてもタイムリーなテーマになるであろう。

（京都大学生態学研究センター デービッド・ヘンブリー）
（日本語修正 潮 雅之）

Charles D. Bonham (2013) 『Measurements for Terrestrial Vegetation, Second Edition.』 Wiley-Blackwell. 246pp. ISBN 978-0-4709-7258-8 価格 \$89.95

2013年6月に「陸上植生の測定」第2版が出版になった。わたしは、植生の統計的調査方法とデータのまとめ方に関心をもつ者として、本書の紹介と意義、若干の批評を行いたい。

著者は、コロラド州立大学フォート・コリンズ校で大平原の草地研究を行っていた。統計的手法に詳しく、退職後も調査方法や統計モデルの研究を行っている。本書では草本植物だけではなく木本植物の調査方法についても検討を行っている。

1983年に出版された第1版では、多くの参考文献をもとに植生調査における出現頻度、被度、密度、バイオマスの測定方法を網羅的に紹介した。しかし、それぞれの測定方法と器具によるデータの測定精度や信頼性、再現性については、十分な検討がなかった。第2版では、調査方法に関しては、ほぼ出現頻度、被度、密度、バイオマス、その後発展したリモートセンシング技術に対する統計的あるいは空間統計量の新しい情報獲得方法と処理を取扱っている。以下に、「はしがき」に続く9章を紹介し、わたしの感想を述べたい。

第1章 Introduction（序）：植生調査における植物の高木、低木、草本など生活型の定義、測定の対象となる植生がもっている特性としての出現頻度、被度、密度、バイオマスの定義を述べている。さらに、長期モニタリングの重要性について述べている。長期モニタリングは、主に植生の維持や環境問題を取扱う場合に重要となるが、わが国ではまだ歴史が浅いとはわたしは考えている。

第2章 Sampling units for measurements（測定のためのサンプリング単位）：出現頻度、被度、密度、バイオマスの項目ごとに、種々の測定方法が図入りで解説されている。たとえば、被度の測定では、point法、point frame法、point line法、line intercept法などがある。わが国で多くつかわれている目視による方法でも、より精度を高める方法として、50 cm × 20 cmのコドラート内を10 cm × 20 cmの5つの小枠に区切って、小枠ごとに目視で被度を求める。森林の調査では、樹高や幹の太さ、樹冠の測定に利用できる器具類にふれている。

第3章 Statistical concept of field sampling（野外サンプリングに必要な統計的概念）：データの平均や中央値などの位置に関する数値はもちろんであるが、データのバラツキの大きさを表す分散や範囲などの数値が重要であると主張している。つづいて、植生調査で得られるデータが従うと考えられる基本的な統計分布として正規分布、ベルヌイ分布、幾何分布、パスカル分布、負の二項分布、二項分布、ポアソン分布を紹介している。また、調査に必要な標本数の決め方について述べている。標本数は、日本語にも翻訳されているSnedecor & Cochran（1989）にもっと詳しく書かれている。

第4章 Spatial sampling designs for measurements（測定のための空間的なサンプリング計画）：ランダムサン

プリング（単純無作為標本抽出）から層別標本抽出、系統的標本抽出の方法の説明がある。わたしたちは、ともするとライン上に隣り合って並べた多数のコドラートの調査を行ったりするが、このようにして得られたデータ間には独立性が保たれていないから、統計的検定や区間推定の前提条件を満たしていない危険性がある。ここでは、ランダムな地点での調査の重要性を述べている。また、ランダムな地点を測定したとしても、級内相関（あるいは自己相関）は0にならないことが多く、統計的検定や区間推定に問題が生じる。ライン上に並んだコドラートを調査する場合には、この級内相関を利用する解析方法を工夫するべきである。第2版では、新たに衛星データからのサンプリング法について触れている。調査に先立って標本抽出の設計を行っておくことは重要である。特に、近年行われる環境保全のための大面積・長期間の調査（たとえば、スイス全土にわたる植生調査の例をあげている；Wilidi 2010）では、事前にしっかりした将来も変更しない設計が必要である。このために必要なサンプリング設計の概略が示されている。

第5章 Frequency（出現頻度）：出現頻度の推定方法、コドラートの大きさや形（正方形、長方形、円形など）、必要な標本数について述べている。わたしたちは、コドラートの大きさや形については無頓着なことが多いが、コドラートの境目にある植物をコドラート内とするかコドラート外と判定するかなど、調査をする人によって、また植生の草丈や調査の難易度によって差が生じることはよく知っている。コドラート面積/境目の長さの比が大きい円形のコドラートを用いることが奨励される。さらに、全体で同一面積になる観察であっても、全体の面積はコドラートの大きさと数の積であるから、様々な数と大きさのコドラートに決めることができる。コドラートの大きさと数は、最も精度のいい方法になるよう予備調査で決めておく必要がある。出現頻度の調査は、基本的には見てかぞえるのだが、写真+コンピュータによる処理も可能な場合がある。

第6章 Cover（被度）：植生調査で最も広く使われる測定で、実に多くの被度の種類とそれらの測定方法が紹介してある。植生全体の被度、樹冠の被度、地表面で植物・リター・裸地を分別する被度、家畜等に有用な植物で上下方向に重なっている植物を積算して測定する被度、植物種ごとの平面図としての被度などの測定があり、目的によって測定方法は異なる。測定の方法、器具、被度が従う統計分布モデル、角度を用いる方法、ライントランセクトで推定する方法などが示されている。そして最後に、目視で行うやや質的な方法として、わが国でも用いられている Braun-Blanquet や Daubenmire の方法がある。碁盤の目状に区切ったサンプリング単位を用いて調査を行った場合の、調査単位間の相関の把握には Moran の相関指数が有用なことを著者の研究例を用いて示している。

第7章 Density（密度）：一定面積内の個体数と言いかえることもできる。草本植物では、個体数がかぞえられない種が多く、この測定の制限になっている。しかし、森林の樹木では個体数の測定は普遍的である。森林では、

コドラートを設けること自体に困難を伴うことがある。そのため、いくつかのランダムな地点から最近個体までの距離にもとづいて個体数を測定する方法、ある地点から4つの象限ごとの最近個体までの距離にもとづいて個体数を推定する方法、最近個体ではなくたとえば3番目に近い個体までの距離にもとづいて個体数を測定する方法などが考えられている。これらのモデルでは、樹木の個体はランダムな地点に分布していることが推定式の前提になっている場合が多いが、その前提が崩れる場合が存在する。たとえば、個体間には縄張りのように必ず一定値以上の距離がある場合や、個体が集団を作る性質がある場合には、ランダムモデルとは違う前提のモデルによる推定式が必要である。

第8章 Biomass（地上部現存量）：現存量は、家畜生産の場では基本的に重要な測定値である。草本植物では、現存量はコドラート内の植物の刈取りによって推定しているが、簡便法や非破壊的なサンプリング方法も考えられている。まず予備調査で、バイオマスの目視によってつけたランク値（点数） x と、同じ地点で刈取った現存量 y を測定し、 x から y への回帰式を推定する。本調査では多数の目視調査で x を得て、この回帰式によってバイオマス y を推定する2段階サンプリング法がある。1980年代からわたしたちが開発したコドラート当たりバイオマスの理論的頻度分布を用いた、草本植物の簡便推定法（Shiyomi 1992）がある。物理的な方法としては、近接センシングによる方法が示されている。樹木のバイオマス調査では刈取りができないから、それに代わる工夫がいくつか示されている。バイオマスを、被度や密度などの関数として推定する方法、放射エネルギー量、気温、降水量などの気象条件と LAI などの重回帰あるいはシステムモデルを使って推定する方法などに触れている。低木林の地上部生産量とバイオマスの推定には、アロメトリーの利用が有効で、実例が示めされている。高木のバイオマス、葉量、材の量を立木のまま推定することは容易でないため、測定器具や推定算法に工夫がなされてきている。また、樹木の場合も、サンプル数やコドラートの大きさと形は、推定精度にかかわるので古くから研究が行われてきたが、これらに関する本書の情報は有用であろう。

わたしたちが長年、苦勞してきた植物地下部の測定については、本書では全く触れていない。牧草地の植物や乾燥した草原における草本植物、ましてや木本植物の地下部の推定は容易ではない。生態系内の一次生産量の算出、ひいては地球規模での炭素蓄積量の推定には地下部のバイオマスの推定は欠くことができない。

第9章 Monitoring and evaluation（長期連続観察と評価）：まず、長期連続観察と評価が、自然生態系の構造や機能の理解と、その生態系の持続的管理に欠かせないと述べている。そのためには、長期間調査のための固定コドラートを設定し、植生地図の作成が必要である。時間軸に沿って、リモートセンシングや GIS を利用して生態系や景観データの変化を明らかにしていく。また、植生の標徴種による植生名の命名も必要であろう。長期・大規模な観察のためには、種の変化が分かりやすい被度

による測定が利用しやすい。さらに、利用状況下での生態系の維持のためには、たとえば自然草原における家畜の放牧頭数の管理も必要である。長期にわたる自然生態系の維持の観点からの陸生植物の植生調査は、行政からの依頼や行政への報告・勧告と密接に関係づけられる。

本書では、種数と種構成の調査についてはほとんど言及がない。植生の特性として種数や種の多様性は重要であるが、なぜこの問題に言及しなかったのだろうか？種ごとの出現頻度や被度、密度の調査から、自動的に種名と種数は決定できるから、種構成の調査を兼ねることができるからか？最近では、dark diversity と呼ばれる普段は見えない種（地下部、季節的变化、見落としなど）の多様性が問題にされるようになってきている（Hiiesalu et al. 2012）が、この問題にも触れなければならない。

本書では国際的に広く用いられている相対優占度や重要度（importance）は、全く扱われていない。これらの特性が意味するところが不明確で、かつ数理的な扱いが困難であるためではないかと考えられる。

本書で扱われた出現頻度、被度、密度、バイオマスの度数分布すべてが、第3章で示された確率分布で表現できるわけではない。これらの植生の特性に関する確率分布や密度関数については、わたしたちが研究してきた（Chen et al. 2008）。

植生調査の方法については、日本草地学会（2004）が編集した「草地科学実験・調査法」にも記述があるが、調査の目的、使用する器具類、解析方法についての記載は本書がより幅広く豊富である。本書は伊藤・村井（1977）や Southwood & Henderson（2000）の動物調査法の解説書に対する植物版の一つであると考えられる。

参考文献

- Chen J, Shiyomi M, Yamamura Y, Hori Y (2007) Frequency distribution models for spatial patterns of vegetation abundance. *Ecol Model* 211: 403-410.
- 伊藤嘉昭・村井 実 (1977) 動物生態研究法. 古今書院, 東京.
- 日本草地学会編 (2004) 草地科学実験・調査法. 全国農村教育協会, 東京.
- Hiiesalu I, Opik M, Metsis M, Lilje L, et al. (2012) Plant species richness belowground: higher richness and new patterns revealed by next-generation sequencing. *Molec Ecol* 21: 2004-2016.
- Shiyomi, M (1991) The estimation of herbaceous biomass in grazed pasture by visual observation. *J Jpn Grassl Sci* 37: 231-239.
- Snedecor GW, Cochran WG (1989) *Statistical methods* (8th edition). Iowa State University Press, Ames.
- Southwood TRE, Henderson PA (2000) *Ecological methods*, 3rd Ed. Blackwell Science, London.
- (放送大学茨城学習センター 塩見正衛)

日本生態学会編・沓掛展之・古賀庸恵担当編集 (2012) 「現代の生態学 5 行動生態学」 共立出版株式会社 292pp. ISBN:978-4-320-05738-8 3400 円 (本体価格)

行動生態学はオワコン¹か？—これは2012年日本動物行動学会大会におけるラウンドテーブル（自由集会）のタイトルの1つであり、華の時代を謳歌してきた「行動生態学」へのアンチテーゼとして、反響を呼んだ。こと我が国においては、行動生態学の新しい手法や概念は積極的に取り入れられ、多くの教科書も編纂されてきた。「行動生態学入門」（粕谷）、「動物生態学」（嶋田・粕谷・山村・伊藤）といった重厚な教科書は、行動生態学研究成果の体系と言えよう。しかし21世紀に入ってから、私の知る限りは「行動生態学」を体系的に俯瞰する和書はでていなかった。これまでの知見の蓄積を改めて見渡すため、（そしてオワコンなのか確かめるべく、）本書を紐解くこととした。なお本書評では、なるべく各章の書評を独立にかつ self-contained に構成するよう努めたので、気になる章の書評だけを参照することも可能である（本心を言えばすべて読んでもらえると冥利に尽きるというもののだが）。

さて本書はその道のプロによって分担執筆され、完結的な各章から構成されているわけだが、第1章は、「行動生態学の基礎」。表現型ギャンビット、戦略モデルの原理、進化ゲーム理論、進化的安定性、血縁淘汰といった行動生態学の基礎である枠組みがまとめられている。そのなかでも圧巻は、行動生態学の金字塔の一つである Hamilton 則を、Grafen の秤を用いてエレガントに導出しているところだ。ただ一つ物足りない点は、「相互作用のコスト・ベネフィット」の「適切な (=Hamilton 則が意味をもつための)」解釈や、Queller の回帰血縁度との整合性が呈示されていないことだ。しかし多くの解説で散見される（時に誤謬と誤解を導く）「コスト・ベネフィットの割り算」方式を採用しないことによって、コスト・ベネフィット・血縁度がそれぞれマイナスの値をとる場合などにまで、Hamilton 則が幅広く適用可能であることがよくわかる。群淘汰と血縁淘汰との理論的な等価性や、「群淘汰」というターミノロジーの誤用・誤謬とそれに関する議論、そして「戦略モデルの原理」のキーになる Price 方程式についても言及が欲しかった、というのはあまりにも欲深い感想だろう。

第2章では「採餌・捕食回避」という相補的な2つの行動セットが概説される。個人的に、この理論についてはあまりフォローできていなかったため、とても楽しませてもらった。まずは採餌行動。最適餌選択理論は昔から非常に多くの知見の蓄積があるのだが、それが明確に示されている。特に、理論が大きな効力を発揮するところが何度も強調されていて、好印象だ。この最適餌選択理論は検証可能な予測を生み出す行動生態学理論の代表なのであろうが、現在は一体どのような問題に直面しているのかが気になった。たとえば私が想像したところでは、採餌というのは繰り返し実現される行動であるから、多くの動物は学習機構を備えていると仮定すると、「餌Xは取りにくい・取りやすい・質が高い」といった情報

(統計的には、採餌成功・効率・味などに関する分布)を、Bayesian Update することが期待されるだろう。それは遭遇する餌価値の期待値や分散に大きく依存するし、遭遇機会も考慮する必要がある。また、ベルトコンベア式の採餌ではなく、資源可利用の不確実性が強い場合の採餌行動は、その不確実性の強さに大きな影響を受けるだろう。あるいは、局所的な餌場において点在する餌の可利用性に、大きなバラツキがあることもあろう。そういった(比較的)新しい考え方のレビューもあれば、尚良かったように思う。さて、採餌行動の次は、捕食回避の進化のレビューだ。私にとってはここも鮮烈で、特に、カムフラージュのセクションや、Bates 型擬態と Müller 型擬態とが continuum という説明はきわめて明解だった。こういったビジュアルな情報というのはヒトの目から見ても「精巧度」と「成功度」が直感的なので、さぞかし多くの研究者の興味を惹きつけてきたことだろう。英語のレビュー論文を一本読むよりも、よほど手取り早い。私にとっては、本書を通じてもっとも満足したところであった。

第3章、「移動・どこに住むか」。Lévy 飛行や理想自由/専制分布の解説から、多様なスケールで動物の移動パターンを解析することを可能にした最新の技術紹介まで兼ねた章である。特に、掲載されている移動ネットワーク図は、非常に印象的で驚異的だ。従来の移動現象の研究が直面してきたサンプリング問題や対象生物の選択に関する制約は、最新の技術を用いることで大幅に克服されるはずだ。本章においては適応的意義として環境効果や近親交配回避などが取り上げられて入りがしかし、血縁者間の競争、ヘテロシス、都市化や温暖化など、どういった選択圧が連鎖的に作用して移動形質は進化し、分布や集団構造を形成、そしてそれが逆に他の形質にどのような選択圧を与えるのか、という比較的あたらしい研究結果がレビューされていないのは残念だ。移動にかかわる生活史シンドロームは移動分散の研究において古今問わずホットなテーマであり、レビュー論文や書籍も数多く出版されている。それを詳解した和書がほぼ皆無である以上、解説は欠くに欠けないものではないだろうか。だがこれに関しては、「移動」という言葉の用い方に関して様々な作法があるという進化生態学の実状も、考慮する必要はあるというのが、事情をそれなりに理解している私からのフォローだ。たとえば、昆虫における長翅型・短翅型などの多型の進化や、翅の退化など (dispersal) は至近要因も究極要因も、盛んに研究されてきた。その結果としての分布様式 (dispersion) や、哺乳類のグループ間の移動や交換 (exchange) も社会行動において本質的である。さらに、本章で主眼的に取り扱われているのは「渡り」と言われるものだ (migration あるいは partial migration)。これらは、この分野において独立に研究が進められるとともに、皮肉にもそれ故に混同されてしまっているのである (特に、dispersal か migration に関しては、ほぼ趣味や流儀の問題だ)。こういった移動分散の規模の違いや現象の意義の解明については、この教科書や著者の裁量という局所的な問題では全くなく、世界の移動研究界での混乱という大域的な問題であ

ろう。

第4章「メカニズム・至近要因」。分子生物学で発展した手法が、表現型ギャンビットで突き進められてきた行動生態学のブラックボックスを埋める刺客として大きな存在感を示していることが、よく伝わる。表現型、可塑性、遺伝子型、というおおまかな概念やその解析法、そして著者自身の研究対象である生物時計や神経制御、最後に新しいトピックであるパーソナリティの研究への切り込みまで、発展と展望がレビューされていて面白い。一般的な概念と具体的なトピックとが並列されていて展開についていきにくい所もあったが、なるほど生態学的な一連の行動は、行為者の形態と強く連鎖したシンドロームであるはずだ (カブトムシの角・体サイズと交尾戦略との相関など)。その「行動の発生過程」にまで焦点を当てる「エコ・エボ・デボ」、そしてそのためのメカニズムの解明について、今後の発展への期待を改めて感じた。

第5章で展開される「表現型進化の理論 アダプティブ・ダイナミクス」のアダプティブ・ダイナミクス (AD) とは、特定の形質に関する表現型の収束・分岐を追跡するためのフレームワークの名称だ。和文での詳説は佐々木顕氏によるものに限られているので、改めて別の理論家による解説を読めるのは新鮮であった。本章は AD 流行の草分けである Geritz et al. (1998)² を礎としているが、Abrams, Matsuda & Harada (1993)³ や Takada & Kigami (1991)⁴ といった日本の数理生物学者による成果がさらにその礎をなしていることも、日本人の手がけた和書にあってはぜひ示して欲しかった。さらに、各式変形や解析・解釈などに明確な根拠が与えられておらず、その論理展開についていきにくい可能性も否めない (これは理論家特有の注文だろう)。しかし、AD のテクニカルな側面にも焦点を当てつつ、PIP⁵ を用いてグラフィカルに AD の有用性が示されていて、初学者にとってもたいへん勉強になるはずだ。紙面の都合を無視して欲を張れば、単一形質の AD 理論がツールとしては完成されつつある現状、(表現型可塑性ふくむ) 高次元の形質の進化的収束・分岐への拡張や、AD による種分化理論に関する論争の紹介、そして何より「自然選択は必ずしも最適化プログラムではない」ことが理論的にも明らかになったというメッセージや、ニッチ分化以外の具体例もあれば尚よかつただろう。自然選択の結果として均衡が達成されるための局所的な条件を調べる上で有効に機能する AD は、もはや進化生態学者の誰しもが (使えずとも、知識として) 備えていることを期待されるほどに標準的な手法である、と言うのが私の経験上の見解だ。それを呈示することに成功した、素晴らしい章だった。ただテクニカルな側面として、収束安定性は、「バクトル値関数としての適応度勾配 $D = D(x)$ の、在来型の表現型値 x への線形的な依存性」で定義するほうがベターだ⁶。

第6章は性と性淘汰 (I)。一般的な性研究についておさらされ、前半には性の実在から、有性生殖における繁殖様式や性比・性転換が扱われている。なるほど性の問題は古くから研究者を魅了してきただけあり、蓄積も豊富だが、ここでの「有性生殖の2倍のコスト」に関す

る記述は、厳密には不正確だ。本書では集団の増殖率という指標で有利不利を決定しているが、「(例えば 1:1 で) 有性生殖をしている集団に突然変異で生じた無性生殖個体は、遺伝子頻度を高め、集団を乗っ取ることは可能か? 完全に乗っ取ったあと、有性生殖個体は侵入できるか?」という収束安定性・進化的安定性の問題を論ずるべきである(そのための進化ゲーム理論と AD だ)⁷。さて、後半は性淘汰が論ぜられているが、特に配偶者選択において優良遺伝子仮説とランナウェイ仮説とが実は continuum の両端であり、多くはその中間的なモデルであるという Kokko の仮説は知らなかったので、興味深かった。ただ、ハンディキャップ原理に関しては Grafen によって進化的に安定な状態が存在することが証明⁸され、Iwasa らによって量的遺伝学的に平衡点が安定に存在することが示されるなど、理論的なサポートも得られたことに関する言及がないのは少し寂しい。

第7章は性と性淘汰(II)。主として性的対立機構と配偶システムについての近年の理解が紹介されている。ここは第6章との棲み分けに大きな労苦があったことが推察される。前半の性的対立機構はさまざまなスケールで観察されることがよく伝わるが、特に後半の配偶システムの紹介は興味深かった。しかしここでは、移動分散(正確には、グループ間のメンバー交換、メンバーの加入)と子殺しとの関係があっても良かったように思う。なるほど配偶システムというのは様々な生態学的特性をうけて進化してきたものであると同時に、他の形質(性比、移動分散、社会行動など)を進化させる大きな力になるであろう。だが、どこまで「配偶システム」という言葉が意味を持つのかは、この記述からは不明確だ。ソリッドな配偶システムが見られる系のほうが稀である可能性はあるし、それが見られるとしても、その系統的な背景についてもここでは何も述べられていない(配偶システムの獲得起源)。おそらく実際は、さまざまな他形質との joint evolution に従って獲得されてきたシステムなのであろう。

第8章は「親子関係・発達」。生活史というのは「点」ではなく「線」であるため、様々なステージにおいて行動が形成され、一連の行動形質を形作る(行動シンドローム)。それが大変わかりやすくレビューされている章だった。特にこの分野は、Trivers が親子間対立に関する有力な仮説を提唱して以来、非常に重点的に研究されてきたことだろう、具体例がたくさん示されていて情報量が豊富であるとともに、そのコメントもひとつひとつが解りやすい。ただ、BOX8.3 の「Trivers の親子間対立仮説」においては、親から見た子の血縁度と子同士の血縁度とが互いに異なるために生ずる対立構造の質的な解説がなされているわけだが、「誰にとってのコスト・ベネフィット」なのかは、すこし分かりにくかったように思う。

第9章は「社会行動」。さっそく「種の保存論の呪縛」をぶったぎる論調は非常に軽快だ。「そもそも種とは、ヒトが生物を分類するために作り出した概念であり、ヒトが作った概念のために生物の行動が進化するという目的論は元から論理的に成立しない」というフレーズには、

私はつよく心を打たれた。これほどにまで、種の保存論を論理的に非正当化しているフレーズを、私は見たことがない。さて、本章の主旨はもちろん種の保存を否定することではなく、社会進化をいかに説明するか、ということだ。ここでもっぱら取り扱われているのは、社会性でも特に「真社会性」である。そのための準備として Hamilton 則が紹介され、社会行動の分類が行われている(BOX9.1)⁹。続いて社会進化や血縁認識が取り扱われているが、いずれも具体例が呈示されていてわかりやすかった。正直なところ、膨大に蓄積されている社会進化の研究をほとんど全くフォローできていなかったため、よく勉強させてもらった。なかでも特に、著者自身によるシロアリ女王のフェロモンの特定が、もっとも興味深く圧巻だった。論文や本書からは察しきれぬ、多大な苦勞が伴ったことだろうが、コロニー内の化学的なコミュニケーションは、社会進化において本質的なポイントである。女王のフェロモンが正直なシグナルとして機能していることはよくわかった。しかしそうなるといったいどこまでワーカーは鋭敏な受容体を有しているのであろうか。疑問は尽きない。

第10章は「信号・コミュニケーション」。コミュニケーションの生理的な機構の紹介から始まり、コミュニケーションのスケールなどについて逐一紹介されている。しかしこの章は、他章とも重複するさまざまな現象を広く取り扱うことにならざるを得ない(信号やコミュニケーションは普遍的である)ためか、各論の紹介にとどめられており、私のような初学者にとっては、整理しながら読むのにかなり苦勞したというのが本音だ。もう一度あえて断るが、他の章との棲み分けがむずかしい章だというのはよくわかる。それだけに要点が私にはよく理解できなかった。それならば、著者らの趣味を反映させた、思い切った構成にしても良かったのかも知れない(たとえば、「騙し・盗聴」など)。いずれにせよ、この信号・コミュニケーション現象の一般性じたいはとても興味深い。人間の知覚・認識を超えたコミュニケーションが、野外では常に交わされているに違いない。なお、感覚便乗仮説 SEH の説明(p.220)において、SEH の最も大きな功績として従来のモデルや理解に要請されていた条件が説明されているが、ここで私はとても混乱してしまった。私の理解はこうだ：(1) オスの装飾形質とメスの選好性形質が娘・息子に等しく遺伝される必要は、ない。ただし娘・息子に等しく遺伝すると、進化の速度は大きい(つまり、進化上は「効率が良い」という期待は尤もだろう)；(2) ヒッチハイクによらずとも、あくまで、交配に選択がかかることによる同類交配の結果として、連鎖不平衡は生ずる；(3) (1) は「遺伝相関」というよりも「メンデル遺伝」やゲノム刷り込みなど、遺伝様式に関する記述である(遺伝相関すること自体は必要な仮定だが)；(4) 性選択の雌雄の形質をコードする遺伝子が性染色体上にあったとしても、連鎖によるヒッチハイクは要請される仮定ではない。たとえ、オスの装飾形質の遺伝子とメスの選好性形質の遺伝子が、それぞれ性染色体上の上のっているとしても、それが遺伝する限りは、娘・息子の好みや装飾が進化的に有利たり得る；(5) 「ヒ

ッチハイク」は揶揄的な表現ではなくもはや、連鎖不平衡を導く至近的な現象として一般的に用いられるターミノロジーである；以上の点については自身の根本的な勘違いに起因する可能性もあるので、認識を新たに、勉強し直したいと思った次第だ。

最終章、第11章は「進化・系統」。進化上の問題を比較法によって論ずるには系統関係（歴史）の考慮が必要であるということ、量的遺伝モデルによる選択圧の測定、種間比較アプローチの有効性などがまとめられていて、たいへんおもしろい。これは、多くの数理生物学の教科書では言及されていない所だ。私自身は系統解析を自ら行なった経験はないのだが、原生の生物の形質群はすべて歴史を負った結果として形成されてきていることを改めて認識させられる。（私自身も採用している）表現型ギャンビットはこういった種間比較法に対して時として脆弱であるからだ¹⁰。その事実は行動生態学に実際的な苦勞をもたらすことが往々にしてあるが、それと同時に、議論の幅を広げる大きな可能性を与えるだろう。たとえば、共進化解析や、特定の形質（群）が歴史の中でどれくらい独立に獲得されてきたかという解析は、我々の観察している生物の形質群がいかにロバストか稀かを推定するための、大きな武器とも言えるわけだ¹¹。深く頷きながら読ませて頂いたが、さらに、著者の興味対象である協同繁殖のパートも、簡潔にまとめられていて勉強になった。要点とメッセージ、その具体例がコンパクトにまとめられた、最終章にふさわしく素晴らしい章であったように思う。私自身は、この章を読んで初めて、協同繁殖に興味を持ち勉強するに至ったため、たいへん感謝している。

全体を通じて。何よりも好印象だったのは、各ターミノロジーの英語表現がすべて述べられている点だ。これは情報の応用性を非常に高める。また、その道に精通した専門家が分担執筆するというスタイルも、それぞれの章を独立なレビューとして読み進めるうえで好ましいように思う。総合的に見て、2010年代を代表する素晴らしい教科書だと思う。本書評においてはあえて、各章の担当者の氏名を明記しないように努めたが、編集者や各章の著者の皆様には、深くお礼を述べたい。今後も私ふくめ多くの研究者が何度も手にとってお世話になること、請負だ。ただし、多くの落ち度も思い当たる。たとえば、性比や分散、繁殖システムのシンドロームについては何も言及はないし、同じようにたとえば大型哺乳類のネットワークや紐帯の構築、子殺し、分散、雌雄の繁殖戦略など、一連の行動現象がいかにして形成されていて、それは進化的にどのような意義があるのか。こういった、一般的な現象をまとめあげる形で集団は成立しているはずだ。統合的な見地に立った意見やレビューがあっても良かっただろう。

さて、はたして行動生態学はオワコンだろうか？ファジーに答えるとその可能性はあるだろう。が、今後はその射程圏を広げることが可能なのではないか。動物の行動のなかでも、人間から見るとただの間違いや不注意、ミスとみられる行動にも進化的な意義がある可能性はあるし、他にもたとえば、植物による社会行動（他個体と

の相互作用）の進化や、ミクロスケール（特に細胞レベル）の進化、Evo-Devo、生態・進化フィードバックについても、これからも行動生態学で発展されたアプローチや概念を武器に、切り込んでいける。その意味で、「行動生態学」はその礎を築くことに成功している。行動生態学は、確かに先人たちによって築き上げられてきた「コンテンツ」かのような印象にとらわれる。つまり先人たちの仮説をただ検証するだけの学問であるとなると、それはオワコンと言える可能性はある。しかし行動生態学はコンテンツではなく非常に有力なツールであると捉え直すことで、私自身はオワコン論に終止符を打つことは容易だと考えている。

本書評を執筆するにあたって、九州大学の粕谷英一氏には、非常に意義深いコメントを頂いた。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げる。

脚注

1. 「オワコン（時代遅れな）コンテンツ」、略して「オワコン」。2011年に流行ったインターネットスラング。なお、私は日本動物行動学会に参加した経験を有さないが、そういった自由集會が開催されるという噂を、様々な方面から耳にした。
2. Geritz, S.A.H., Kisdi, É., MeszÉna, G., & Metz, J.A.J. (1998) Evolutionarily singular strategies and the adaptive growth and branching of the evolutionary tree. *Evol. Ecol.* 12: 35-57. ADを用いて進化を解析するほとんどの場合には引用される論文（ただしちょっとした「宗派」があり、引用の傾向にはバイアスや趣味が見られるように思う）。
3. Abrams, P., Matsuda, H., and Harada, Y. (1993) Evolutionarily unstable fitness maxima and stable minima in continuous trait values. *Evol. Ecol.* 7: 465-487. 自然選択が必ずしも最適化プロセスではないということを先駆けて示した論文。これも進化ゲーム理論における大金字塔の1つだ。
4. Takada, T., & Kigami, J. (1991) The dynamical attainability of ESS in evolutionary games. *J. Math. Biol.* 29(6): 513-29. 進化的に安定な状態が自然選択の結果として達せられるか、ということを経験的に定義し、どういった適応度関数のクラスでは均衡状態が達成されることが期待されるかの分類も行なっている。なお、Attainability (Takada & Kigami 1991, Christiansen 1991) は、Convergence Stability (収束安定性) よりも「進化的な安定性が達成されるか」をあらわす素直な言葉遣いなので、私は気に入っている。
5. Pairwise Invasibility Plot, 通称「ピップ」。進化する形質に対して、横軸に野生株の表現型、縦軸に変異株の表現型をプロットし、候補となる平衡状態にむけて自然選択が作用するか、そしてその平衡状態は進化的安定か、という（いずれも局所的な）安定性を可視化した図。1次元形質でしかPIPは再現されないが、視覚的にダイナミクスを理解できるという絶対的メリットがある。計算機の環境次第では、初学者には、Hitchhiker's Guide to Adaptive Dynamicsは

色々と遊べて面白い：<http://adtoolkit.sourceforge.net/>

6. 僭越ながら代替案を提示したことには、2つの理由がある。まず、そのほうが複数形質への拡張がスムーズで容易であるからだ。より具体的には、適応度勾配ベクトル D の表現型値ベクトルへの依存性として、内部平衡点における、適応度勾配 D の Jacobi 行列の負定値性によって、(強い) 収束安定性がダイレクトに定義できる。第二に、「適応度勾配の変化」による定義のほうがおそらく直観に馴染むからだ。単一形質に関する収束安定性の定義については「進化生態学入門」(山内)を参照されたい。あるいは、Leimar, O. (2009) Multidimensional convergence stability. *Evol. Ecol. Res.* 11: 191-208. がテクニカルな論文として、そして Taylor, P. D. (1996) Inclusive fitness arguments in genetic models of behaviour. *J. Math. Biol.* 34: 654-674. がコンセプチュアルな論文として、それぞれ有用だ。前者は収束安定性の強弱や進化的安定性の強弱、後者は「安定性」の規準の定式化やその様々なクラスのモデルへの適用などについてまで、幅広くかつ詳しく扱われている。
7. より正確には、「互いに遺伝子プールを共有しており完全に有性生殖する個体たちからなる集団において、部分的に無性生殖も少しだけ行なう突然変異個体は、その遺伝子プールにおいて遺伝子頻度を高められるか」という、有性生殖の短期的な有利さ(有性生殖の進化的安定性)に関する問題提起に相当しており、有性生殖が安定して維持されていることを思考実験する上で自然に要請される論理だ。なお、この論理に関する問題は、本書の異型配偶子の進化的安定性を説明するところにおいても同様であった。
8. Grafen, A. (1990) Biological signals as handicaps. *J. Theor. Biol.* 144: 517-546. ハンディキャップ原理の成立仮定のもとで、進化的に安定な信号が非常に広いパラメタ領域で一般的に存在することを数学的に示した論文。既に1700件以上の引用があり、ハンディキャップ原理をかたる上では欠かせぬ論文である。Iwasa, Y., Pomiankowski, A., & Nee, S. (1991) The evolution of costly mate preferences II. The 'handicap' principle. *Evolution* 45: 1431-1442 も同様にハンディキャップ原理の成立を、こちらは量的遺伝学モデルを用いて理論的に示したものとして挙げられる。なお、Maynard Smith による、彼自身がハンディキャップ原理と格闘した経緯や Grafen の論文に関するコメントリーが Web 上で観られる (URL の末尾を 53 にすると Grafen の論文の解説動画)。
<http://www.webofstories.com/play/john.maynard.smith/51>
9. 社会行動の分類に関しては、West, S. A., & Gardner, A. (2010) Altruism, spite and greenbeards. *Science* 327: 1341-1344 が有用だ。たとえば、「コストを払って、他個体を傷つける行動」は、一見すると両損的(スパイト)である。しかし他個体の子供を殺してしまうことによって、自身の子供は資源競争が緩和されるという可能性もある。その場合、行為者はコストを払って他個体の子供を傷つけたはずが、実は他個

体の子供を傷つけることによって利益を獲得していた(つまり利己的である)可能性がある。このように、社会行動の帰結を実証研究で量的に評価することは一般には難しいが、直感に訴えかけるように、行動の様式を分類することは、社会行動の進化理論では大きな意味を持つ。ただ、最近の包括適応度理論への攻撃的な意見を目にするに、こういった分類は「便宜的なものである」ということを強調する必要があるように感じる。

10. 理論上は、hopeful monster が進化しうるため。だから(少なくとも私は)進化モデルの中では「コスト」や「トレードオフ、負の相関」、「制約」を、(なるべく、自然な作法で)課そうとする。
11. こうした系統的制約がむしろ武器となる理由は、表現型ギャンビットが調べる対象である「進化的安定性」が「進化の止まる(=ジェノタイプやハプロタイプが集団において単一になるような)候補点」であるのに対し、実際は地球が存在する限りは進化が止まることがほとんどあり得ないからだ。種間比較アプローチは、そのような原理的な制約を克服し、これまでの形質群の進化シナリオのロバストネスを推定できる。
(九州大学大学院システム生命科学府 入谷亮介)

市川昌広・内藤大輔・祖田亮次編 (2013) 「ボルネオの<里>の環境学—変貌する熱帯林と先住民の知」昭和堂 227pp. ISBN: 978-4-8122-1319-3 定価 4536 円 (税込)

本書は、ボルネオの先住民が生活をするために使ってきた領域=「里」において、先住民を中心とした人々が、社会および自然環境の変化にどのような影響を受け、どう対応しているのかを、特に先住民の「知」に注目しながら論じたものである。ボルネオはグリーンランド・ニューギニアに次ぎ、世界で3番目に大きな島であり、全域が熱帯雨林気候に属する。アジア~オーストラリア熱帯域の中では、ニューギニアと並んでもっとも植物の多様性が高い場所である。本書の第4章が示すように動物の多様性も高い。研究対象として魅力的である上に、政治的に安定しているため、多くの生態学者が日本をはじめ世界各地から訪れて研究している。行政的には、北~北西の面積27%の部分がマレーシアとブルネイに属し、マレーシア領にはサラワクとサバの2州がある。残る南側はカリマンタンと呼ばれてインドネシアに属し、東・中央・西・南の4州がある。

本書は以下の章からなる。タイトルに地名が含まれていない章については、著者名の後に調査地をカッコ内に示した。

- | | | |
|-----|-----------------------|--------------------|
| 序章 | ボルネオの里と先住民の知 | 市川昌広・祖田亮次 |
| 第1章 | 小規模社会で形成される植物知 | 小泉都(東カリマンタン州・サラワク) |
| 第2章 | 了解可能な物語をつくる—河川災害とつきあう | |

	ために 祖田亮次・目代邦康 (サラワク)
第3章	里のモザイク景観と知のゆくえ—アブラヤシ栽培の拡大と都市化の下で 市川昌広(サラワク)
第4章	動物をめぐる知—変わりゆく熱帯林の下で 加藤裕美・鮫島弘光 (サラワク・サバ・中央カリマンタン州)
第5章	科学的林業と地域住民による林業—マレーシア・サバにおける認証林の事例から 内藤大輔
第6章	サラワクの森林開発をめぐる利権構造 森下明子

「里」という言葉から、本書で語られる先住民の「知」とは、自然環境についての昔ながらの認識のことだと読者は思うかもしれない。本書の序章によれば、そのような知は「伝統的生態学的知」と呼ばれ、科学的な根拠を先住民自身が認識していなくても、結果的に持続可能な自然資源利用につながっていると評価されることが多い。しかし、本書で語られるのは、驚くほどダイナミックに変わっていく地域社会と、それに伴い変貌していく「知」の姿である。第1章と第4章のそれぞれで扱われる先住民、西プナンとシハンは狩猟採集民だったが、1950～70年代に定住して農業を始めるようになったという。また、第2章によると、ボルネオの焼畑民は、植民地政府が法的に移動を禁じ、近代土地法が浸透する以前は、数年から数十年単位で移住を繰り返していたという。さらに、第3章では以下のような歴史が紹介される。20世紀初頭にはサラワクでは先住民によって盛んにゴム園が作られたが、1960年代以降はゴムの価格がさがったため下火になった。そのかわりに先住民は同時期から盛んになった企業による森林伐採に関連する出稼ぎに出た。1980年代からはアブラヤシの栽培が盛んになる。当初は企業によるプランテーション開発が中心であったが、近年は先住民も参入するようになってきた。現在では、都市化が先住民社会にも影響を大きく及ぼし、日本の里山と共通するアンダーユースによる「里」の荒廃＝二次林の成熟林化が起こりつつある。

第1章では東カリマンタン州が主要な調査地だが、サラワクとの国境に近い内陸部である。また、第4章では、サバ・中央カリマンタン州では哺乳類相の調査が行われただけで、人間社会についての調査はサラワクだけで行われている。なので、本書の主題である人間社会についての調査は第5章を除いては、ほぼサラワクだけで行われたことになる。第5章はサバ州東部の、川沿いに住むイスラム教徒の先住民（といっても数百年前に移住してきた）オラン・スンガイを対象としている。このようにボルネオといいながら、本書の扱っているのはボルネオの一部でしかない。特にボルネオの面積の73%を占めるカリマンタンでの事例が少ないのは残念である。

評者は1995年からサバ州西部のキナバル山（ボルネオの最高峰で山頂の標高は4095 m）周辺で森林生態の調査をおこなっている。この地域の先住民はオラン・スンガイではなく、多くがキリスト教徒の内陸部焼畑民のドゥスン（カダザン）である。本書では扱われていない地域であるが、この20年間の変化はやはり驚くべきも

のがある。ぬかるんで四輪駆動車も通れない伐採道路を延々と歩いて訪れた焼畑最前線の村に今は電気が来ている。途中までの砂利道はアスファルトに舗装された。当初の調査助手の村人は乗合バスでの通勤で、朝来なくても電話もないのでどうしようもなかったが、今ではみんな自分のバイクや車を持っていて、携帯電話で呼び出せばすぐ駆けつけてくれる。サバ州の首都コタキナバルの街も行くたびに、新しい建物がたち、広い自動車道が整備されていくのだが、それを上回るスピードで車の量が増えていき、朝夕の交通渋滞は慢性的になりつつある。めまぐるしく変化する社会という点では、本書で扱われている事例と共通する。日本の高度成長期も同じようなものだったのかもしれないが、つい50年前までの狩猟採集民が今は携帯電話を使っているというボルネオの状況は、日本の歴史の2000年分に相当するといえるかもしれない。

本書の強みは、現地調査をおこなった具体的な事例にこだわりながら（ただし、第6章だけは、主題の性格上、文献に基づく）も、それを地域研究という学問分野の一般的な問題枠組みに照らし合わせ、また、世界・国家・州といった様々なレベルでの政治経済的な要因のもとに解釈している点であろう。その意味では、扱う地域に偏りがあっても、一般性はある程度確保されている。評者がサバ州西部で目撃した地域社会の表層的な変化も、本書の事例と同様に、世界・地域両レベルでの政治経済的な要因と深く関係しているのだろう。熱帯林破壊が問題とされるようになって久しい。ボルネオではかつては、森林伐採と焼畑が元凶と言われ、現在ではアブラヤシのプランテーションの拡大が憂慮されている。第3章は、アブラヤシ栽培が成り立つかどうかは地形に依存し、地形が悪い場所では焼畑や森林伐採が行われなくなった二次林が原生的な森林へ回復していくことを予想している。キナバル山周辺もアブラヤシには標高が高すぎるので、同じことが予想されるかもしれない。

評者が大学院生だったころ、周囲に日本の里山研究の草分けとなった人たちがいて、里山は水稲耕作をおこなっている日本あるいは東アジア独特なんや、と書いていたように記憶する。里山という言葉を広めた四手井綱英のように、里山の定義を狭く「農用林」に限定すればそうかもしれない。しかし、現在では、環境省の「SATOYAMA イニシアティブ」のように「原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域」という程度の意味で里山という言葉を使うのがふつうである。そういう意味では、「里」は世界中にあるわけで、熱帯地域で研究をおこなっている人はもちろん、日本の里山はじめ世界各地の二次的自然に興味を持っている人に参考になると思う。

(鹿児島大学理学部地球環境学科 相場慎一郎)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2013年締切 (*印:2014年締切)
研究・活動助成	公益財団法人 とうきゅう環境財団 http://www.tokyuenv.or.jp/invite	1月15日*
藤原賞	公益財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	1月31日*
自然科学研究助成	公益財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月4日*
研究援助	公益財団法人 山田科学振興財団 http://www.yamadazaidan.jp	2月28日*
女性研究者奨励 OM 賞	公益社団法人 日本動物学会 http://www.zoology.or.jp/html/04_infomembers/04_index.htm	3月29日
環境問題研究助成	公益財団法人 ニッセイ財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月7日*
学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/	4月16日*
研究助成	公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp	5月7日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-biol/index.html	5月16日*
生物多様性みどり賞	公益財団法人イオン環境財団 http://www.midoripress-aeon.net/jp/	5月31日*
育志賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/index.html	6月13日*
遠山椿吉記念、食と環境の科学賞	一般財団法人 東京顕微鏡院 http://www.kenko-kenbi.or.jp/	6月30日*
環境研究助成	公益財団法人 住友財団 http://www.sumitomo.or.jp/	6月30日*
新 LRI	一般社団法人 日本化学工業協会 http://www.j-lri.org/	7月22日
文部科学大臣表彰科学賞	文部科学省研究振興局 http://www.mext.go.jp/b_menu/boshu/index.htm	7月17日
奨励研究助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	7月31日
研究者育成助成	公益財団法人 ロッテ財団 http://www.lotte-isf.or.jp	8月30日
朝日賞	財団法人 朝日新聞文化財団	8月31日
助成事業	公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo-cosmos.or.jp/	9月17日
記念基金助成	独立行政法人 日本万国博覧会記念機構 http://fond.expo70.or.jp/	9月30日
沖縄研究奨励賞	公益財団法人 沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyoukai/	9月30日
木原記念財団学術賞	公益財団法人 木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp/	10月31日
環境研究総合推進費	一般財団法人 日本環境衛生センター http://www.env.go.jp/policy/kenkyu/index.html	11月7日
研究助成	公益財団法人 鹿島学術振興財団 http://www.kajima-f.or.jp/	11月10日
研究助成	公益財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日

一般社団法人日本生態学会役員一覧

代表理事（会長）	齊藤 隆	2014.1 ~ 2015.12
業務執行理事		
（次期会長候補）	可知 直毅	2014.1 ~ 2015.12
（専務理事）	陶山 佳久	2013.1 ~ 2014.12
（庶務担当）	石田 清	2013.1 ~ 2014.12
（会計担当）	牧野 能士	2013.1 ~ 2014.12
（ER 編集担当）	久米 篤	2014.1 ~ 2015.12
（生態誌編集担当）	古賀 庸憲	2014.1 ~ 2015.12
（保全誌編集担当）	角野 康郎	2012.1 ~ 2014.12

理事（2014.1 ~ 2015.12）

浅見崇比呂	巖佐 庸
大手 信人	黒川 絃子
竹中 明夫	辻 和希
中野 伸一	西廣 淳
半場 祐子	宮下 直
矢原 徹一	吉田 丈人

監事	石田 厚	2014.1 ~ 2015.12
	小泉 博	2014.3 ~ 2015.12

代議員（2014.1 ~ 2015.12）

全国代議員	大手 信人	粕谷 英一
	加藤 真	河田 雅圭
	近藤 倫生	竹中 明夫
	辻 和希	中静 透
	中村 太士	西廣 淳
	日浦 勉	宮下 直
	宮竹 貴久	矢原 徹一
	吉田 丈人	

地区代議員	野田 隆史（北海道）
	黒川 絃子（東北）
	上條 隆志（関東）
	浅見崇比呂（中部）
	井鷲 裕司（近畿）
	永松 大（中国・ 四国）
	巖佐 庸（九州）

Ecological Research 編集委員会（2014.1 ~ 2017.12）

Editor-in-Chief	久米 篤	
Managing Editor	鈴木 準一郎	
Associate Editors		
in-Chief	福井 学	久保田康裕
	宮下 直	大手 信人
	野田 隆史	李 博
	Ming Dong	井鷲 裕司
	石井 弘明	金子 信博
	熊谷 朝臣	三木 健
	野口 航	陀安 一郎
	富松 裕	辻 和希

Handling Editors

伴 修平	原 正利
半場 祐子	梶 光一
菊沢喜八郎	木庭 啓介
工藤 岳	松尾奈緒子
仲岡 雅裕	大塚 俊之
佐藤 一憲	清和 研二
陶山 佳久	瀧本 岳
梅木 清	日浦 勉
藤卷 玲路	高橋 耕一
濱村奈津子	北村 俊平
松崎慎一郎	村上 正志
村岡 裕由	中路 達郎
奈良 一秀	工藤 洋
江成 広斗	角谷 拓
山浦 悠一	
Min Cao	Jae Chun Choe
Franck Courchamp	Stuart J Davies
Tom J. de Jong	Jingyun Fang
Raghavendra Gadagkar	Rhett D. Harrison
Sun-Kee Hong	Bas W. Ibelings
David W. Inouye	Kari Klanderud
Simon A. Levin	Mathew A. Leibold
Mark D. Scheuerell	Janne Sundell
Ping Xie	Hoi Sen Yong
Niels.P.R.Anten	Yunting Fang
Jan Frouz	Andrew Lohrer
Zhijun Ma	Ariel Novoplansky
Eun Shik Kim	Stephen D. Sebestyen
Stephanie A. Bohlman	Brenden Holland
Tsewang Namgail	Pil Sun Park
Bo Song	E. Ashley Steel
Arndt Telschow	

日本生態学会誌編集委員会（2014.1 ~ 2016.12）

編集委員長	古賀 庸憲	
編集幹事	伊東 明	大塚 俊之
	芝田 史仁	
編集委員	沖津 進	市岡 孝朗
	小林 剛	津田 みどり
	北出 理	土田 浩治
	村岡 裕由	永光 輝義
	相場慎一郎	和穎 朗太
	島野 光司	金尾 滋史
	鈴木 英治	嶺田 拓也
	村上 貴弘	河口 勇生
	肘井 直樹	戸丸 信弘
	中川弥智子	笠原 玉青
	岡野 隆宏	鏡味麻衣子
	今藤 夏子	高田 宜武
	箱山 洋	山浦 悠一

保全生態学研究編集委員会 (2012.1 ~ 2014.12)

編集委員長	角野 康郎		
編集幹事	西廣 淳	三橋 弘宗	
編集委員	井口恵一朗	石井 実	
	石濱 史子	井上 幹生	
	植田 睦之	梅原 徹	
	加藤 真	角谷 拓	
	河口 洋一	倉本 宣	
	小池 文人	小池 裕子	
	高田まゆら	高槻 成紀	
	館野 正樹	中越 信和	
	長谷川雅美	早矢仕有子	
	藤井 伸二	増田 理子	
	山本 智子	湯本 貴和	
	横溝 裕行	横山 真弓	

塩尻 かおり

生態学教育専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	西脇 亜也		
	嶋田 正和	畑田 彩	
	平山 大輔	丑丸 敦史	
	広瀬 祐司	中井 咲織	
	亀田佳代子	中田 兼介	
	白川 勝信	宮田 理恵	

大規模長期生態学専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	日浦 勉		
	伊東 明	大手 信人	
	黒川 紘子	三枝 信子	
	柴田 英昭	鈴木 智之	
	仲岡 雅裕	中村 誠宏	
	正木 隆		

自然保護専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	加藤 真	：海洋	
副委員長	吉田 正人	：関東・自然公園・エコツーリズム	
幹事	井田 秀行	：MAB	
地区選出委員	須賀 丈	：中部	
	露崎 史朗	：北海道	
	紺野 康夫	：北海道	
	竹原 明秀	：東北	東 信行：東北
	川上 和人	：関東	和田 直也：中部
	金子 有子	：近畿	中井 克樹：近畿
	井上 雅仁	：中国・四国	
	大田 直友	：中四・四国	
	逸見 泰久	：九州	伊澤 雅子：九州
専門別委員	増沢 武弘	：高山・亜高山	
	竹門 康弘	：陸水	
	清水 善和	：島嶼	
	久保田康裕	：熱帯・亜熱帯	
	横畑 泰志	：寄生生物	
	阿部 晴恵	：遺伝子	
	三浦 慎吾	：鳥獣管理	
	竹中 千里	：大気汚染	
	矢原 徹一	：外国涉外	
	村上 興正	：環境行政	
	安溪 遊地	：エネルギー問題	
	角野 康郎	：湿地	

生態系管理専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	鎌田 磨人	：里山・協働	
副委員長	松田 裕之	：野生生物管理	
幹事	西廣 淳	：河川・湖沼・防災	
幹事	橋本 佳延	：里山林・草原・協働	
	角野 康郎	：湖沼・河川・湿地	
	國井 秀伸	：汽水・河口	
	古賀 庸憲	：海洋	
	佐藤 利幸	：高山	
	塩坂比奈子	：普及	
	白川 勝信	：湿原・草原・協働・制度	
	高村 典子	：陸水	
	竹門 康弘	：河川	
	津田 智	：草原・湿地	
	富田 涼都	：環境社会学	
	中越 信和	：景観生態	
	中村 太士	：河川	
	西田 貴明	：協働・制度設計	
	日鷹 一雅	：水田・農業生態系管理	
	平吹 喜彦	：震災復興	
	逸見 泰久	：渚・海洋	
	正木 隆	：森林・林業	
	三橋 弘宗	：河川	
	村上 興正	：自然保護	
	谷内 茂雄	：流域管理モデル	
	矢原 徹一	：保全生物学	
	山田 俊弘	：森林	

将来計画専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長	辻 和希		
	巖佐 庸	奥田 昇	
	粕谷 英一	五箇 公一	
	酒井 章子	佐竹 暁子	
	田中 健太	仲岡 雅裕	
	中丸麻由子	小泉 逸郎	
	立木 佑弥	三木 健	
	北島 薫	森長 真一	

日本生態学会賞・宮地賞・大鳥賞・奨励賞選考委員会

大手 信人	2012.6 ~ 2014.12
佐竹 暁子	2012.6 ~ 2014.12
正木 隆	2012.6 ~ 2014.12
大園 享司	2013.6 ~ 2015.12
中野 伸一	2013.6 ~ 2015.12
野田 隆史	2013.6 ~ 2015.12

大会企画委員会

委員長 吉田 丈人 2013.4 ~ 2015.3
副委員長 半谷 吾郎 2014.4 ~ 2016.3

【運営部会】

北村 俊平 2011.4 ~ 2015.3
辻野 亮 2013.4 ~ 2016.3
竹中 明夫 2005.1 ~ 2015.3
川北 篤 2010.4 ~ 2015.3
唐 艶鴻 2011.4 ~ 2015.3
大澤 剛士 2011.4 ~ 2015.3
三木 健 2012.4 ~ 2015.3
黒田 啓行 2012.4 ~ 2015.3
関野 樹 2012.4 ~ 2015.3
山田 俊弘 2013.4 ~ 2015.3
佐々木晶子 2014.4 ~ 2016.3
中川弥智子 2014.4 ~ 2017.3
富松 裕 2014.4 ~ 2017.3

【シンポジウム部会】

横溝 裕行 2013.4 ~ 2016.3
柴田 銃江 2014.4 ~ 2017.3
鈴木 牧 2012.4 ~ 2015.3
村岡 裕由 2012.4 ~ 2015.3
佐藤 一憲 2012.4 ~ 2015.3
松村 俊和 2012.4 ~ 2015.3
安部 淳 2012.4 ~ 2015.3
長谷川 功 2012.4 ~ 2015.3
岩崎 亘典 2012.4 ~ 2016.3
東樹 宏和 2013.4 ~ 2016.3
小林 真 2013.4 ~ 2016.3
大西 尚樹 2013.4 ~ 2016.3
福島慶太郎 2014.4 ~ 2017.3
曾我部 篤 2014.4 ~ 2017.3
岩田 繁英 2014.4 ~ 2017.3

【ポスター部会】

丸山 敦 2012.4 ~ 2015.3
内海 俊介 2013.4 ~ 2016.3
富田 瑞樹 2012.4 ~ 2015.3
和田 直也 2012.4 ~ 2015.3
安立 美奈子 2013.4 ~ 2016.3
金田 哲 2013.4 ~ 2016.3
上村 真由子 2013.4 ~ 2016.3
高原 輝彦 2013.4 ~ 2016.3
土居 秀幸 2013.4 ~ 2016.3
赤坂 卓美 2014.4 ~ 2017.3
小野田雄介 2014.4 ~ 2017.3
栗和田 隆 2014.4 ~ 2017.3

【高校生ポスター部会】

和田 直也 2013.4 ~ 2015.3
西脇 亜也 2014.4 ~ 2017.3

嶋田 正和 2012.4 ~ 2016.3
丑丸 敦史 2013.4 ~ 2016.3
竹下 俊治 2013.4 ~ 2016.3
土居 秀幸 2013.4 ~ 2016.3
高原 輝彦 2014.4 ~ 2017.3
中井 咲織 2014.4 ~ 2017.3
栗和田 隆 2014.4 ~ 2017.3
富山 清升 2014.4 ~ 2017.3

【発表編成部会】

山本 智子 2013.4 ~ 2016.3
牧野 能士 2014.4 ~ 2017.3
戸田 求 2012.4 ~ 2015.3
遠藤 千尋 2012.4 ~ 2015.3
藤巻 玲路 2012.4 ~ 2015.3
松尾 奈緒子 2013.4 ~ 2016.3
櫻井 玄 2013.4 ~ 2016.3
山平 寿智 2014.4 ~ 2017.3

【英語口頭発表部会】

辻 和希 2013.4 ~ 2015.3
三木 健 2013.4 ~ 2015.3
久米 朋宜 2013.4 ~ 2015.3
田中 健太 2013.4 ~ 2015.3
藤井 一至 2013.4 ~ 2015.3
日室 千尋 2014.4 ~ 2016.3

野外安全管理委員会

委員長 鈴木準一郎 2014.4 ~ 2016.3
粕谷 英一 2014.4 ~ 2016.3
石原 道博 2014.4 ~ 2016.3
北村 俊平 2014.4 ~ 2016.3
大館 智志 2013.4 ~ 2015.3
飯島 明子 2013.4 ~ 2015.3
奥田 昇 2013.4 ~ 2015.3

キャリア支援専門委員会 (2014.4 ~ 2016.3)

委員長 別宮 由紀子
副委員長 中坪 孝之
池田 浩明 富田 基史
飯島 勇人 深谷 肇一
西田 貴明 鈴木 智之
坂田 剛 三宅 恵子
佐々木晶子 木下 晃彦
岩井 紀子

電子情報委員会 (2014.1 ~ 2016.3)

委員長 竹中 明夫
久保 拓弥 大澤 剛士
富田 基史 眞板 英一



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 中野伸一

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

2014 (平成 26) 年度 センター活動予定

生態学研究センターにおける2014年度の活動予定は以下の通りです。

センターニュース、セミナーなど、センターの最新情報は、ホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>) で公開しています。

1. プロジェクト

大型共同研究としては、2010年度から始まった「遺伝子発現の季節解析にもとづく植物気候適応の機能解明と予測技術開発」(研究代表者: 工藤 洋) (総合科学技術会議最先端次世代研究開発プログラム) が昨年度で終了し、最終的に高い評価を受けた。また、流動連携機関である総合地球環境学研究所との共同企画プロジェクト (2件)、地球環境研究総合推進費による共同研究 (3件)、科学研究費補助金による研究 (19件)、JST 戦略的創造研究推進事業 (CREST) (1件)、JST 戦略的国際科学技術協力推進事業 (1件)、JST 研究成果展望事業 (A-STEP) (1件)、JST 戦略的創造研究推進事業 (さきがけ) (1件)、農水省ゲノム情報を活用した農畜産物の次世代生産基盤技術の開発プロジェクト委託事業 (1件)、国立極地研究所研究プロジェクト (2件)、民間財団寄付金による研究 (2件) も進められている。

2. 協力研究員

引き続き、協力研究員 (Affiliated Scientist) を公募する。

3. 共同利用・共同研究事業 (次頁の表を参照)

2014年度の共同利用・共同研究事業として、分野間の交流や若手研究者育成の観点から、3件の共同研究、4件の研究集会・ワークショップを採択した。開催日程などの詳細は、当センターのホームページに掲載する。

4. 生態研セミナー

前年度に引き続き、月一回程度 (第三金曜日) センター外の方々も自由に参加できるセミナーを開催する。場所は京都大学生態学研究センター第二講義室 (会場への道順は、センターのホームページ参照) の予定である。

5. ニュースレターの発行

センターニュースは、印刷物として年に3回 (7月、11月、3月) 発行する予定である。また、その内容は、センターのホームページでも公開する。センターの活動紹介の他、研究の自由な討議の場を提供していきたい。

6. オープンキャンパス、公開授業

京大附置研究所・センターの一般公開イベント「京大ウィークス」に時期を合わせ、一般公開「授業で習わない生き物の不思議」の開催を予定している。また、大学院入試案内のためのオープンキャンパスも開催の予定。日程などはいずれもセンターホームページに掲載する。

7. 共同利用施設

大型分析機器: DNA 関係では DNA 多型解析、遺伝子転

写定量解析用機器など、安定同位体関係では、水の酸素・水素同位体比分析前処理装置（水平衡装置）とGC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 MAT252、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、酸素・水素同位体比オンライン自動分析装置（熱分解型元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）、LC/C（高速液体クロマトグラフ付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 delta V plus、PreCon-GasBench II（自動濃縮装置付き気体導入インターフェイス）、炭素・窒素同位体比オンライン自動分析装置（元素分析計）、GC/C（ガスクロ燃焼装置付き前処理装置）を装備した安定同位体比質量分析計 delta V advantage の計 3 台。

琵琶湖観測船：高速観測調査船「はす」、「エロディア」が稼動しており、観測調査、実習に利用される。これらの船舶は、旧センター所在地（下阪本）に係留

されている。

シンバイオトロン：ズートロン、アクアトロン、水域モジュールが利用可能である。

実験圃場林園：センター敷地内には、実験圃場、樹種植栽林園、林木群集実験植物園、CER の森、実験池があり、種々の野外実験に利用されている。

上記施設・設備の利用希望者は、事前に担当者に連絡してください。

DNA シークエンサー等関係：工藤

安定同位体関係：陀安

観測船関係：小坂橋

シンバイオトロン関係：奥田

実験圃場林園関係：川北

8. 協議員会、運営委員会、共同利用運営委員会

昨年度と同様、それぞれ数回開催される予定である。

平成 26 年度 共同研究・研究集会・WS 採択申請一覧

泉井 桂	近畿大学先端技術総合研究所	共同研究 a	C4 光合成の酵素遺伝子を導入した C3 植物における光合成代謝の修飾の程度の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比の測定による検討
Nancy Cabanillas-Terán	Universidad Laica Eloy Alfaro de Manabí, Manta, Manabí. Ecuador	共同研究 a	Marine invertebrate isotopes as indicators to detect anthropogenic impacts on coastal reef ecosystems in Ecuador
大手信人	東京大学大学院農学生命科学研究科	共同研究 a	温帯森林からの窒素流出機構に関する日米共同比較研究：同位体比情報を用いた流出 NO_3^- の起源推定
陀安一郎	生態学研究センター	ワークショップ	安定同位体生態学ワークショップ 2014
奥田 昇	生態学研究センター	ワークショップ	若手研究者のための夏季観測プログラム in 木曽川
川北 篤	生態学研究センター	研究集会	国際ホソガ科蛾類シンポジウム
高尾祥丈	福井県立大学海洋生物資源学部	研究集会	越境の微生物学：Microbes beyond borders

センター関係者の動き

- 1) 研究員（研究機関）の上船雅義氏が、3月31日付けで退職しました。
- 2) 研究員（研究機関）の赤松史一氏が、3月31日付けで退職しました。
- 3) 山道真人氏（白眉センター 特定助教 4月1日付採用）が、センターで研究を開始しました。
- 4) Jeremy James Piggott 氏（オタゴ大学（ニュージーランド）・研究員）が、招へい研究員（客員研究員）として4月7日～7月6日の予定で滞在中です。
- 5) Joseph Kenneth Bailey 氏（テネシー大学（アメリカ合衆国）・准教授）が、招へい研究員（客員准教授）として6月3日～9月2日まで滞在予定です。
- 6) 平成 26 年度の研究員（研究機関）は井田 崇氏、佐藤博俊氏、土岐和多瑠氏の 3 名です。

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。
新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。
下記会費および地区会費の合計を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年12月末までに退会届を事務局まで提出してください（ウェブサイトにて申込フォーム有り）。
会費を1年分滞納した会員には会誌の発送を停止し、2年分滞納した時は自動的に退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

会員種別	年会費* (保全誌購読者**)	大会発表	総会・委員 (選挙・被選挙権)
正会員（一般）	11000円 (13000円)	○	○
正会員（学生）	8000円 (10000円)	○	○
団体会員	22000円	×	×

*生態学会では収入の少ない若手一般会員のために、学会費・大会参加費を学生会員と同額にする措置を実施します。
詳細はウェブサイトをご覧ください。

**非会員の方の保全誌定期購読料は年額5000円です。
なお、保全誌は発行後2年間、オンラインアクセスができません

【論文投稿の権利】

- ・日本生態学会誌 正会員のみ有
- ・保全生態学研究 正会員・保全誌定期購読者のみ有
- ・Ecological Research 投稿権利は会員に限定されません

【冊子を必要としない（オンラインアクセスのみの）会員への割引】

- ・日本生態学会誌 600円
- ・Ecological Research 900円

既会員の方が今後申請される場合は、割引を受けたい年の前年10月末までに問い合わせページを通じて事務局へご連絡ください。

新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年より適用されます。

地区会費

正会員は、住所（所属機関か自宅のうち、郵送物の配布先となっているほう）により、地区会に参加することになっています。各地区会ではそれぞれ独自に地区会費を定めています。学会費の納入時には、これらも含めて請求しますので、あらかじめご了承ください。

- ・北海道地区（200円）：北海道
- ・東北地区（600円）：青森県・岩手県・宮城県・秋田県・山形県・福島県
- ・関東地区（400円*）：茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県
- ・中部地区（0円）：長野県・新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県
- ・近畿地区（400円）：滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
- ・中・四国地区（400円）：鳥取県・島根県・岡山県・広島県・山口県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
- ・九州地区（700円）：福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県

*ただし当面は徴収しない

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町1-8

Tel&Fax 075-384-0250 <http://www.esj.ne.jp/>

※お問い合わせはウェブサイトからお願い致します。